

平成 17 年度 ~ 平成 19 年度

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)

研究開発実施報告書【3カ年分】

都道府県番号 

0	5
---	---

SELHi 学校名 秋田県立能代北高等学校

	課・係等	氏 名	連 絡 先
管理機関 事務担当者	秋田県教育庁 高校教育課 指導主事	水谷 佳延	電 話 : 018-860-5165 F A X : 018-860-5808 E mail : mizutani-yoshinobu@pref.akita.lg.jp

	職 名	氏 名	連 絡 先
SELHi 指定校 事務担当者	教 諭	高橋 哲	電 話 : 0185-52-3127 F A X : 0185-52-3128 E mail : mail@noshirokita-h.akita-c.ed.jp

## 平成17～19年度 SELHi 研究開発実施報告書

- 1 SELHi 学校名 秋田県立能代北高等学校
- 2 研究開発実施期間 平成17年度 ~ 平成19年度
- 3 研究開発課題 「異文化理解」、「受信型コミュニケーション能力」、「発信型コミュニケーション能力」からなる、「対話型コミュニケーション能力」を育てる指導方法の研究

### 4 研究開発課題の設定理由

#### (1) 現状

1988年(昭和63年)4月に本校に英語科が設置された。英語科の指導の特色として、1年次の夏、2年次の秋にそれぞれ英語集中セミナーを行い、多くのALTと寝食を共にしながら、英語でコミュニケーションを図ろうとする積極的な態度を養ってきている。また、本校独自の海外語学研修を1996年(平成8年)以降行っており、参加希望生徒が夏休みを利用して3週間オーストラリアでのホームステイを体験しながら、国際交流や異文化理解を深めている。

英語検定にも積極的に取り組んでおり、毎年英語科の卒業生の約6割が英語検定2級を取得している。海外留学生も毎年英語圏から受け入れるとともに、本校生徒も海外に留学して国際交流を推進している。

しかし、現在の生徒の英語力は日常会話には苦労しないものの、その英語を使って自ら情報を発信し、相手と意見を交換する段階までなかなか到達していないのが実情である。そこで、平成17年度入学の英語科を対象として以下の研究開発課題を設定した。

#### (2) 課題

これからの国際化社会に対応するためには、相手の論旨を正しく理解し、伝えるべき事を的確に表現していく能力が必要であり、そのような能力を「対話型コミュニケーション能力」と捉えている。それは、異なる文化を積極的に理解しようとする異文化理解の態度や、英語で情報を受け取る受信型コミュニケーション能力に加えて、自ら英語で情報を発信したり、論理的に相手と議論を深めていく発信型コミュニケーション能力から成り立つものであると考える。この「対話型コミュニケーション能力」を身に付けるために、学習の対象としての英語ではなく、お互いの意思を伝える手段としての英語を身に付け、主体的・積極的なコミュニケーションを図ることが望まれる。

この対話型コミュニケーション能力を向上させるための本校生徒の課題としては次の三つが考えられる。

A L Tを除けば地域にはほとんど外国人がいないので、英語で自分の意思を伝える機会が非常に限られており、また異文化に対する興味・関心も不足している。

英語の授業以外で、自分の必要とする情報を英語で受け取ったり、理解したりする機会が不足している。

自主的な活動に基づいて、自分の意見を発表する機会が少ないので、自分の興味・関心のあることについて深く考えたり、論理的に自分の意見を組み立てたりしてうまく相手に伝えることができない。

### (3) 研究開発課題の設定と目標

上記の課題を解決し、英語を使って自分の意思を表現し相手と意見を交換できる、より実践的な対話型コミュニケーション能力を身に付けた生徒の育成を目指して、本校では英語科の生徒を対象にして、以下の研究開発課題を設定し、指導方法の研究を試みる。

国際教養大学、秋田大学及び海外姉妹校との交流により、英語学習へのモチベーションを高めるとともに、異文化理解の推進を目指す指導方法の研究

学校の英語化、Content based Teachingにより、英語のインプット量を増やし、英語の受信型コミュニケーション能力の向上を目指す指導方法の研究

スピーチやディベート、及び大学や海外との情報交換を通して、英語の発信型コミュニケーション能力を向上させ、総合的な対話型コミュニケーション能力を身に付ける指導方法の研究

## 5 3カ年の研究計画

研究内容
1 国際教養大学、秋田大学及び海外姉妹校との交流により、英語学習へのモチベーションを高めるとともに、異文化理解の推進を目指す指導方法の研究
平成17年度
(1) SELHi 特別講義 秋田大学 教育文化学部 助教授 渡部良典氏 千葉大学 法経学部 専任講師 西田弘次氏 による特別講義の実施
(2) オーストラリア語学研修の実施 オーストラリア シドニー市郊外 Tyndale Parent Controlled Christian School との交流 異文化理解、コミュニケーションに関するワークショップの実施 ESL 教員による集中講義、現地コーディネーターによるアクティビティ 日本及びオーストラリアの文化についてのプレゼンテーション 校内・校外における英語による報告会(プレゼンテーション)
(3) 韓国姉妹校 養正高校の本校訪問による交流事業 全校生徒による交流会の実施 韓国 養正高校生徒との英語による合同授業

本校生徒宅でのホームステイ  
訪問前、訪問後のメールによる交流

平成18年度

- (1) SELHi 特別講義  
国際教養大学 教授 ケリー キング氏  
国際教養大学 教授 アル レナー氏  
千葉大学 法経学部 専任講師 西田弘次氏 による特別講義の実施
- (2) オーストラリア語学研修の実施  
オーストラリア メルボルン市郊外 Norlane High Schoolとの交流  
異文化理解、コミュニケーションに関するワークショップの実施  
ESL 教員による集中講義、現地コーディネーターによるアクティビティ  
日本及びオーストラリアの文化についてのプレゼンテーション  
校内・校外における英語による報告会(プレゼンテーション)
- (3) 韓国姉妹校 養正高校訪問による交流事業  
韓国 養正高校生徒との交流  
養正高校生徒宅へのホームステイ  
韓国の史跡、文化施設の訪問と日本文化の紹介  
メールによる事前・事後の交流

平成19年度

- (1) 国際教養大学 教授 アル レナー氏による特別講義の実施
- (2) オーストラリア語学研修の実施  
オーストラリア メルボルン市郊外 Norlane High Schoolとの交流  
異文化理解、コミュニケーションに関するワークショップの実施  
ESL 教員による集中講義、現地コーディネーターによるアクティビティ  
日本及びオーストラリアの文化についてのプレゼンテーション  
校内・校外における英語による報告会(プレゼンテーション)
- (3) Norlane High School、Western Heights Secondary School の本校訪問による交流事業  
全校生徒による交流会の実施  
Norlane High School、Western Heights Secondary School 生徒との英語による合同授業  
本校生徒宅でのホームステイ  
訪問前、訪問後のメールによる交流

2 学校の英語化、Content based Teachingにより、英語のインプット量を増やし、英語の受信型コミュニケーション能力の向上を目指す指導方法の研究

平成17年度

- (1) 英語による学級活動(SHR、学級日誌等)
- (2) 学校の英語化(英語による校内表示・SELHi だよりの発行)
- (3) Content based Teaching、英語以外の教科を英語で指導する研究  
世界史B(英語科1年)  
フードデザイン(英語科3年)  
異文化理解(英語科2年)

- (4) NHKラジオ講座の活用  
NHKラジオ講座「基礎英語2」を朝学習で実施する

平成18年度

- (1) 英語による学級活動(英語科1年、2年)
- (2) 学校の英語化(SELHiだよりの発行)
- (3) Content based Teaching, 英語以外の教科を英語で指導する研究  
世界史B(英語科2年)  
家庭基礎(英語科2年)
- (4) NHKラジオ講座の活用(英語科1年、2年)

平成19年度

- (1) 英語による学級活動(英語科1年~3年)
- (2) 学校の英語化(SELHiだよりの発行)
- (3) NHKラジオ講座の活用(英語科1年~2年)
- (4) リスニングソフト Tell Me Moreの活用

- 3 スピーチやディベート、及び大学や海外との情報交換を通して、英語の発信型コミュニケーション能力を向上させ、総合的な対話型コミュニケーション能力を身に付ける指導方法の研究

平成17年度

- (1) 音読評価カード・Jazz Chantsの活用  
音読評価カード、Reading Challenge (英語科1年)  
Jazz Chantsの活用 (英語科1年)  
音読マラソンの実施 (英語科1年、普通科1年)
- (2) Show & Tellの実施  
(英語科1年、普通科1年)  
インタビューテストの実施
- (3) 教科書本文のリテリング活動  
オールイングリッシュによる授業  
英文の内容に関する要約文を完成させるため、キーワードを使って教科書本文の内容をリテリングする活動
- (4) 英語集中セミナー(英語科1年、2年)の実施  
秋田市(旧雄和町)で1泊2日での英語集中セミナーを実施。  
Show & Tell  
コミュニケーション活動  
国際教養大学のキャンパスツアー

平成18年度

- (1) 音読スタンプカード、音読マラソン
- (2) Show & Tell、1分間スピーチの実施  
(英語科1年、普通科1年) Show & Tellの実施  
(英語科2年) 1分間スピーチの実施

(英語科1年、2年)インタビューテストの実施

(3) 教科書のリテリング活動

オールイングリッシュによる授業(英語、英語)

ペアワークの多用

キーワードを使って教科書本文の内容をリテリングする活動(英語、英語)

自分の意見を付け加える活動(英語科2年)

ミニディベート(英語科2年)

サーキットスピーチ(英語科2年)

平成19年度

(1) 音読スタンプカード、音読マラソン

(2) Show & Tell、1分間スピーチ

(英語科1年、普通科1年) Show & Tellの実施

(英語科2年) 1分間スピーチの実施

(英語科1年~3年) インタビューテストの実施

(3) 教科書のリテリング活動

オールイングリッシュによる授業(英語、英語、リーディング)

ペアワークの多用(英語、英語、リーディング)

キーワードを使って教科書本文の内容をリテリングする活動(英語、英語、リーディング)

1分間スピーチの内容をもとにして、賛成・反対の立場から意見を述べる活動(英語科3年)

教科書の内容をもとにして、ディベート形式で意見を述べる活動(英語科3年)

(4) 英語集中セミナー(英語科1年、2年)の実施

秋田市(旧雄和町)で1泊2日での英語集中セミナーを実施。

Show & Tell

コミュニケーション活動

国際教養大学のキャンパスツアー

6 研究開発の内容

研究内容	成果と課題
<p>(1) SELHi 特別講義</p> <p>平成17年度 10月26日：渡部良典氏 (秋田大学 教育文化学部 助教授) 1年生(普通科と英語科の176名)を対象に “English, English, Everywhere”という題で講義を実施した。英語の字幕による日本のアニメの紹介や、日本語によるタイトル(テレビやアニメなど)を英訳したもののクイズを通して、英語への興味付けを行い、さらには英語力を高めるためには、自分の知識と結びつかないと理解することができないため、英語以外の様々な知識が必要なことを示した。 また、英語力を高めるためには、考えながら活動したり、日記を書いたりすることが有効であり、単語を覚えるときのひとつの方法として語呂合わせの紹介など、効果的な学習法についても提示した。</p> <p>2月8日：西田弘次氏 (千葉大学 法経学部総合政策学科 専任講師) 1年生と176名と2年生英語科25名を対象に 「What's communication!?～自分が変われば世界も変わる～」という題で講義が行われた。コミュニケーションというものをバスケットボールでのパスに例え、分かりやすく示した。</p> <p>平成18年度 6月16日：ケリー キング氏 (国際教養大学 国際教養学部 教授) 2年生の英語科(23名)を対象に、初対面の人と積極的にコミュニケーションをとるための練習をQuick Talk を使い、国際教養大学の学生たちと行った。ステップを踏みつつ複雑な会話の内容に発展していく工夫された活動だった。</p>	<p>〔成果〕講義後のアンケートによると、約90%の生徒が「英語が楽しいと思えた」と答え、英語学習への驚くべき興味付けとなった。また「英語についての考え方や意識が変わった」と答えた生徒が約70%であり、英語を別の視点から提示することで英語が嫌いな生徒でも、「ちょっとがんばってみよう」という気持ちになったのはすばらしい成果である。</p> <p>〔課題〕英語の授業で、いかに生徒の興味付けをし、学習の意欲を高めるかが課題である。映像や音楽などの視聴覚教材を取り入れて、魅力ある授業展開をする必要がある。</p> <p>〔成果〕約90%の生徒が「とても分かりやすかった」と答え、「勇気を出して話をしてみようと思う」「もっと頑張って英語を勉強しようと思う」というような感想を持っていた。英語を苦手とする生徒でも、コミュニケーションを図ろうとする勇気を持ち、そして英語を学ぼうとする士気を高めることができた。</p> <p>〔成果〕この特別講義を通じて生徒たちは充実した学習ができた。ケリー先生の快活さと、スピーディーな授業展開に引き込まれるように学習していた。国際教養大の学生たちとの交流も良い刺激となり、今まで以上に積極的に英語を学んでいこうとする良い動機付けとなった。</p>

9月22日：アル レーナー氏

(国際教養大学 国際教養学部 教授)

1年生英語科(31名)を対象に、英語学習に対する動機付けとなるようなコミュニケーション型の授業が行われた。教授自身の自己紹介に始まり、生徒の自己紹介や英語を学習することについての考えを、Quick Talkを通して学習者同士が会話する活動に発展させた。また、“Autumnをテーマにしてイメージを英語で表現したり、詩を読んだりしながら音声を通して英語に親しむ活動が行われた。

2月21日：西田弘次氏

(千葉大学法経学部総合政策学科 専任講師)

1年生英語科(31名)と2年生英語科、普通科の一部(98名)を対象に「人と話そう!人と交わろう!~になりたい自分を目指して~」というテーマで講義した。「生命」の重さについて自分の体験からわかりやすく説明し、その生命を生かしていくには五感を大切に Sixth Sense を磨くこと、恋をすること、小さな目標を持つことなどを説いた。また、人とのコミュニケーションをバスケットボールのパスに例え、相手のことを考えることでコミュニケーションが成り立つことや異文化理解の在り方について話した。

平成19年度

6月22日：アル レーナー氏

(国際教養大学 国際教養学部 教授)

2年生英語科31名対象

9月7日：アル レーナー氏

(国際教養大学 国際教養学部 教授)

1年生英語科31名対象

昨年度と同様に、モチベーションを高めるような授業が行われた。とくに2年生には、国際教養大学の学生がアシスタントとして加わったことも刺激となった。



〔成果〕授業後のアンケートでは、約80%の生徒が、「自分のためになった」または「大変楽しい授業だった」という感想を述べた。また、約7割の生徒は「もっと英語を勉強したいと思うようになった」と答えた。特に英語に大きな関心を持つ生徒は大学の先生の指導に強い刺激を受け、英語学習に対する動機付けとしては素晴らしい効果があったと思われる。

〔成果〕この特別講義を通じて、生徒たちは簡単な英語でスピーディーに相手と会話することを楽しむことができた。また、英語を口に出して読むことの大切さを改めて実感するとともに文法や語法にこだわらず、考えたことを英語で書き記していく学習スタイルに積極的に取り組むことができた。アル レーナー氏の講義の展開には非常にメリハリがあり、終始和やかな雰囲気にも包まれていた。



## (2) オーストラリア語学研修

平成17年度

オーストラリアシドニー郊外で2年生12名(普通科2名、英語科10名)の参加で、7月30日から8月20日まで、約3週間の日程で、語学研修が行われた。ホストスクールとなったTyndale Parent Controlled Christian Schoolは、キリスト教系の幼稚園から高等学校までを持つ私立学校で、ホストファミリーもほとんどがその学校に通っている生徒の家族だった。平日は、ホストスクールへ通ったり、バスで様々な名所を訪れたりし、週末はホストファミリーらとそれぞれ過ごした。

主な活動：

ホストスクールでのESL / 合同授業  
エクスカージョン

Aboriginal Center / Blue Mountains /  
Farm / など

異文化ワークショップ(事前・事後)  
研修報告書の発行

平成18年度

オーストラリアのヴィクトリア州で7月27日から8月17日までの約3週間の日程で語学研修が行われた。参加者は2年生14名(普通科4名、英語科10名)で、ホストスクールとなったNorlane高校は中学1年生から高校1年生まで約390名が在籍していた。学業はもとより、人格形成をするための教育に力を入れており、国際交流にも積極的である。平日はホストスクールへ通い、週末はホストファミリーとそれぞれ過ごした。



平成19年度

前年度と同様、ヴィクトリア州ジロング市にあるNorlane高校を2年生16名(普通科4名、英語科12名)の参加者が訪問し、交流を深めた。

〔成果〕事前と事後に、英語学習のモチベーションを測るためにアンケートを実施したが、その結果、もともと英語に対する意識の高い生徒が参加していたにもかかわらず、事後ではより英語を使って高いレベルのコミュニケーションをしたいという意欲がさらに高まったといえる。実際に英語でのコミュニケーションを体験し、生徒たちは英語によるコミュニケーションにおける自信を深めたと同時に、課題を見つけたようである。特に、英語力の不足から、微妙なニュアンスを伝えられなかったことや、説明できなかったこと、逆に、伝えようという意欲でそれなりに理解し合えた経験が、帰国後の英語学習に対する姿勢を変えたといえる。

また、帰国後に校内で1年生全クラスを対象に英語で研修報告をプレゼンテーションするとともに、能代市主催の国際交流フェスティバルにおいても一般市民を対象に報告会を実施し、研修の成果を発表し、情報の発信に努めた。



事前と事後に、英語学習のモチベーションを図るためのアンケートを実施したが、伸びが顕著だったのが、「英語を話す人たちとのやりとりに使いたいので勉強する」という項目であった。英語を目的としてではなく、手段としてとらえる意識が強くなり、将来的に英語学習を続けようという姿勢も強くなった。研修の報告として、校内で1年生全クラスを対象に英語でプレゼンテーションを行った。

〔課題〕ホストスクールとのメールによる交流を計画していたが、インターネットの接続環境などの問題から、手紙の交換を行った。個人のレベルでは、今でもホストファミリーやホストスクールの先生とのメールでの交流が続いている。

### (3) 韓国姉妹校養正高校 交流事業について

平成17年度

11/14(月)～11/17(木)の日程で韓国の養正高校の生徒・職員12名が来校した。コミュニケーション活動をした後、日本文化についてのクイズを出し、写真等を使用して説明しながら、実践的なコミュニケーションを体験し、自己評価をした。



平成18年度

韓国姉妹校養正高校交流事業について

前年度、養正高校が本校を訪問したのを受けて、9/11(月)～9/14(木)の日程で本校から9名の生徒が養正高校を訪問し交流を図った。本校を訪れた養正高校の生徒宅にホームステイをしながら英語の授業に参加し、お互いの文化について意見を交換した。また国立中央博物館や世界遺産の昌徳宮などを見学し、韓国の歴史や文化についても理解を深めた。



〔成果〕英語科1年の50名に行った事後アンケートによると、英語に対する学習意識が「かなり高まった」のは40%、「高まった」のは30%であり、英語学習の動機付けがかなりなされたようだ。また、韓国人生徒の英語力の高さに驚いたことも今よりもさらに上のレベルを目指す動機付けともなった。

さらに、80%の生徒が韓国への興味が高まった、外国に対する興味が高まったと答えており、異文化に対する動機付けがなされた。韓国人生徒が日本の言葉や文化について知っていることにも刺激を受けたようだった。「韓国の生徒と英語でコミュニケーションができたか」という問に対しては、「かなりできた」が35%、「だいたいできた」が35%であり、「自分の英語が通じると思ったか」という問に対して、「かなり通じた」が25%、「だいたい通じた」が30%であり、受信、発信スキルに対する自己評価は概ね高くなっていることがわかった。

〔成果〕参加生徒を対象に韓国文化に関する事前オリエンテーションを実施することで、異文化に対する関心が高まり、生徒も積極的に交流を図ろうとする態度が見られた。欧米でなくアジアの国を訪問することで、お互いに英語を母国語としないもの同士がコミュニケーションを図ることで英語の必要性を生徒は再確認できたようである。事後のアンケートからも参加生徒は英語学習に関する意識が大きく向上していることがわかった。

交流の内容をSELHiだよりを通じて全校生徒、保護者に紹介し、異文化理解の意識向上に努めた。参加生徒は帰国後もメール等で交流を続けており、これを今後につなげていくことを検討している。

(4) オーストラリア Norlane高校・Western Heights高校との交流事業

平成19年度


9/12(水)～9/24(月)の日程でNorlane高校・Western Heights高校の生徒・職員が来校、本校生徒宅にホームステイをして交流を行った。全校生徒による歓迎式、英語・国語・家庭科・芸術の合同授業、能代市長や地域の小学校への訪問、県内の文化施設の見学など様々な活動を通して、本校生徒と交流を図り、異文化理解や英語学習への動機付けを図った。



〔成果〕平成17年度には韓国 養正高校が本校を訪問して交流を実施したが、短期間であったのに対して、今回の訪問は2週間であり、生徒の交流の機会も前回よりも格段に増えた。英語を使って授業以外でコミュニケーションをとるという機会を本校生徒に与え、異文化理解や英語学習の動機付けに大きな効果があったと思われる。

ホームステイでもお互いに日本とオーストラリアの文化の違いを実感することができた。事後のアンケートによると英語学習への意欲・関心が向上しており、特に普通科においてその傾向が顕著に表れた。英語科に比べて英語を実際に使ってコミュニケーションを使う機会の少なかった普通科の生徒が、オーストラリアの生徒と2週間交流することにより、異文化理解・英語学習への動機付けが高まったと思われる。



<p>(5) 英語による学級活動 (SHR・学級日誌等)</p> <p>平成17年度～19年度</p> <p>SELHi研究クラスである平成17年度英語科入学生において、3年間SHRをできるだけ英語で行い、学級日誌や講演等の感想を英語で書かせることで、英語に触れる機会を多く作り、英語力の向上を目指した。</p> <p>1年次においては学級日誌を徐々に英語で書かせるようにし、担任のコメントもすべて英語で書き、生徒に読ませた。また、SHRでのあいさつなども英語で行い、自然に英語を使用する環境作りに努めた。</p> <p>2年次では学級日誌をできるだけ英語で書くこととした。またSHRや授業でも英語に触れる量を増やすようにした。</p> <p>3年次は学級日誌の記録は基本的にすべて英語で書かせ、必ず前の人に対するコメントをしてから、印象に残った時事的な事について記述するようにさせた。SHRや授業外でも可能な限り英語で生徒に話しかけ、英語による応答を求めた。</p>	<p>〔成果〕担任が日常で英語を使用することにより、英語を聞いたり英語で指示されたりすることに抵抗がなくなった生徒がほとんどで、できるときは英語で応答するようにもなった。教師が英語を使うことで英語の表現を覚えらるから良いと答えた生徒も多かった。英語で頻繁に書かせることにより、授業で出てきた表現を積極的に使用するようになった。</p> <p>アンケート調査の結果では「英語で考えることに抵抗がなくなってきた」という生徒が1年次には62%だったのが、2年次では80%に、3年次では95%に増えた。また、読み手を意識することで、内容に深まりがでてきた。</p> <p>〔課題〕学級日誌をすべて英語で書く生徒は1年次では4割程度で生徒間に差が見られる。また、2年次以降には英語による発話は自然に受け入れられるようになったが、英語で応答できる生徒が少なく、発話への工夫が必要である。日誌に英文を書く際には、内容が稚拙になってしまうこともあり、表現力を高めるようなインプットとアウトプットの練習を多用し、自分の意見をいかに英語で表現するかを指導する必要がある。</p>
<p>(6) Content-based Teaching、英語以外の教科を英語で指導する研究</p> <p>平成17年度 (対象クラス 英語科1年)</p> <p>世界史B</p> <p>6/17 (金)(古代ギリシア史)</p> <p>11/28 (月)(中世ヨーロッパ史)</p> <p>フードデザイン</p> <p>5/20 (金)(イギリス料理について)</p> <p>食文化</p> <p>5/27 (金)(メキシコ料理について)</p> <p>6/24 (金)(イギリス料理について)</p> 	<p>英語のインプット量を増やし、生徒の受信スキルの向上を目指し、世界史Bと家庭基礎の授業を英語で実施した。形態は地歴科教員、あるいは家庭科教員とALTとのTTで行った。</p> <p>(成果)世界史、食文化の授業はそれぞれ各教科担当とALTとのTTで実施した。事前に学習した内容の確認と定着をねらいとして、小グループに分け、課題を解決しながら、理解を図った。フードデザイン、異文化理解の授業においては、本校のALT、他校のALTがそれぞれ自国の文化について単独で授業を行った。</p> <p>〔課題〕世界史の授業においては授業の進捗の関係もあり、限られた回数しか実施できなかった。</p>

異文化理解

6 / 2 (木)(シク教について)



平成18年度

対象クラス 英語科2年(2-5)

世界史B

4 / 21 (金)ルネッサンス

9 / 29 (金)フランス革命とナポレオン

12 / 8 (金)近代文化史

家庭基礎

7 / 6 (木) 子供の手遊び歌

異文化理解の授業に関しては、生徒にも好評で、内容もよく理解されていた。アンケートによると「英語で授業を受けることでより一層関心が高まった」という回答がほとんどであった。今後も異文化理解に関する様々なテーマを取り上げ、計画的に実施することで生徒の受信スキルの向上を目指すとともに、英語学習の動機付けにも活用していきたい。

世界史B

〔成果〕世界史Bは初年度のチームティーチングの授業形態を踏まえながら、基礎的知識や時代背景の理解を中心に年3回実施した。フランス革命に関する授業においては、インターネット上で歴史上の人物を検索し、さまざまな角度からその時代に果たした役割を発表させた。インターネットの辞書機能を活用し、日本語サイトの内容も英語で発表するように指導した。


〔課題〕英語で内容を理解するという点においては良かったが、歴史的、社会的な知識が十分でないために、生徒が自ら英語で自分の意見を交わすというレベルまではいかなかった。アンケートによると「英語で授業を受けることでより一層関心が高まった」という回答がほとんどであった。

(7) NHKラジオ講座の活用

平成17年度～19年度

発信型スキルの基礎をしっかりと養うため、平成17年度より英語科1年・2年においてNHK基礎英語2を朝に毎週3回聞いた。その会話をういてペアでスキットを演じたり、基礎的な会話表現に関する問題や絵を見て英語で説明する問題を定期考査で出題した。

〔成果〕3学期のスキットでは、テキストの会話をペアでアレンジし、名前を変えたり別の一言を付け加えたりしていた。また、普段の何気ない会話に、講座で覚えた表現を使用することもあった。英語による表現力が「かなりついた」と思う生徒は10%、「だいたい」は71%である。英語の学習意識が高い生徒ほどそう感じる傾向がある。

<p>平成19年度 リスニングソフト「Tell Me More」を導入し、英語科のコンピュータ・LLの授業で演習を実施した。</p> 	<p>〔成果〕学年末の生徒のアンケートによると「自分の発音状態が目で確認できるのでよい」、「正しい発音をすることに自信がついた」などの肯定的な意見が大半を占めた。</p>
<p>(8) 音読スタンプカード・Jazz Chantsの活用</p> <p>平成17年度 英語科1年においては音読指導に重点を置き、音読カードを作成し、レッスンが終わるごとに音読を練習した回数と音読の最速時間を記入し、その後でALTに評価してもらった。また、1学期終了時に音読の成果を図るため、教科書の文を読んでテープに吹き込むコンテスト(Reading Challenge)を行い、英語科1年は全員、普通科と2年生は任意とし、県の英語暗唱大会の予選を兼ねた。また、Jazz Chantsを使用し、英語の発音、リズムを鍛えることで英語学習への動機付けを図った。</p> <p>平成18年度 2年次には英語科に加えて普通科においても音読指導を開始した。2年1学期、2学期の中盤まで朝学習で約5分間、週2回の「音読マラソン」を実施。その後、朝学習では週1回の実施とした。通常の授業においてもRepeat, Chorus, Individual, Overlap, Shadowing と様々な音読のスタイルを用いて音読を重視した指導を行い、動機付けを図るとともに、Input, Intake, Outputのプロセスを心がけた。定期考査前に「音読マラソンシート」を提出させ、回数を記録し、SELHiだよりにTOP3を掲載した。</p> <p>平成19年度 3年次においても同様に音読マラソンを実施。カードに回数を記録させ、各レッスン50回の音読を目標設定し、結果を提出させた。50回以下の生徒に対しては放課後指導や個人指導をし、徹底して目標回数を音読させた。</p>	<p>〔成果〕ALTによる評価があるため、「良い評価がもらえるように頑張った」と答えた生徒は約80%であり、音読の練習をする大きな動機付けとなった。「良い評価がもらえると頑張ろうという気になった」生徒は約70%にもなり、達成感も感じていたようだ。「英文をすらすら読めるようになった」と答えた生徒も約90%にも上っている。回数を重ねることでALTの評価はおおむね高くなってきたほか、英語の発音やリズムに対して敏感になり、英語教諭の発話をまねる場面が多くなってきた。</p> <p>またJazz Chantsにより、英語らしく話すようになってきた生徒も多く、英語学習が楽しいと思うことで大きな動機付けとなった。</p> <p>〔成果〕 平成18年度アンケート結果より一部抽出 回答人数</p> <p>普通科2年(151人) 英語科2年(17人)</p> <p>音読は、効果があったし、成績も伸びた。 57/151 (37.7%) 7/17 (41.2%) 音読を、他の教科にも利用している 124/151 (82.1%) 6/17 (35.2%) 今後も、音読を続けていきたい 79/151 (52.3%) 11/17 (64.7%) 音読で、リスニングの力が付いた 46/151 (30.4%) 14/17 (82.4%)</p>

( 9 ) Show & Tell

平成 17 年度 ~ 19 年度

平成 17 年度より 1 年生全クラスで実施した。普通科はオーラルコミュニケーション、英語科は生活英語の授業の中で、自分の大切な物や人について、実物または写真を見せながら英語で発表した。できるだけ平易な表現を用いて相手に自分の考えを伝えることに重点を置き、発信型スキルを高めることがねらいである。英語科 1 年においては 1 回目は英語科集中セミナーで ALT を交えて行い、上位 3 名を入賞者とした。(生徒にはお互いに評価をさせたが、入賞者の決定は ALT の審査による) 2 回目は英語科三校合同研修会で、他校の生徒と共に行った。



普通科 1 年においてもオーラルコミュニケーションの時間に実施し、生徒間で相互評価をさせた。他の生徒の発表に対して、多くの質問が出されるなど、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が見られた。

〔成果〕身近な話題で、しかも実物を使用しての発表だったために、発表しやすかったようである。5 つのグループに分かれて発表者が移動する形式をとったため、事後に行ったアンケートによると、回を重ねるにつれて発表することに慣れ、自信を持つことができたと感じた生徒が多かった。やはり、練習を重ねることが大事だとわかった。2 回目に他校の生徒と行ったときには、自閉症の弟をとりあげ、自分と弟の文字を比較したものを見せながらスピーチをしている生徒も見受けられ、工夫が見られるようになっていた。また、他の生徒による英語の発表を楽しむことができた生徒が多かった反面、言いたいことが言えなかったためにもっと英語力を付けたいと思った生徒が 70 % であり、それに加えて、ほとんどの生徒が他校生徒の高い英語力に刺激を受けたと答えている。これらのことから、Show & Tell の活動が学習の大きな動機付けになったと判断できる。

〔課題〕聞き手が能動的に発表を聞くことができるように、発表者に対して質問をするタスクを負わせたが、質問の仕方に慣れていなかったためあまり活発な質問が出てこなかった。今後はリスニングによるポイントのつかみ方や、内容に関する質問の仕方を指導し、ディベートにつなげていくことが必要である。

( 10 ) インタビューテストの実施 教科書のリテリング、スピーチ

平成 17 年度 ( 1 年次 )

レッスンの終了後に ALT によるインタビューテストを 1 年間で 3 回行い、その様子をビデオに記録した。1 回目はイメージ画を見て教科書の内容をリテリングさせ、2・3 回目は何も見ずにリテリングをさせた後に、ALT による内容に関する質問を実施し、発信能力の向上を目指した。

平成 18 年度 ( 2 年次 )

授業始めに行った 1 分間スピーチを ALT に対して行い、その内容に関して ALT と会話を実施した。

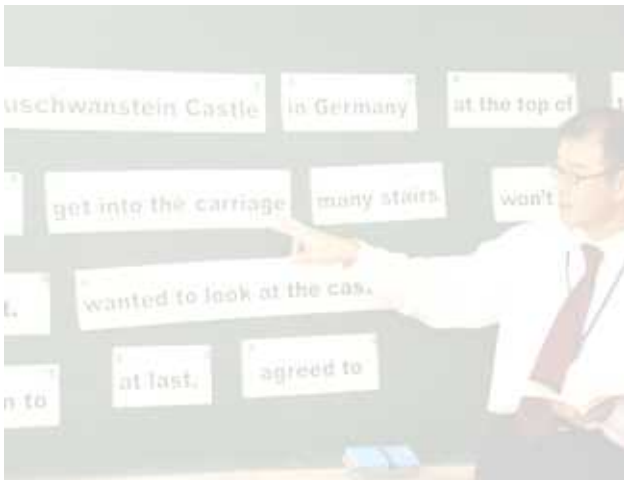
〔成果〕

年間約 3 ~ 4 回のインタビューテストを ALT と行ったことで、英語で会話することに抵抗がなくなっていった生徒がほとんどであった。3 年次には、英語力が飛躍的に伸びた生徒もそうでない生徒にも笑顔が見られ、コミュニケーション自体を楽しむことができるようになったのは最大の成果である。また、キーワードを使って自分の言葉で説明する表現力が高まっただけでなく、表情やジェスチャーを利用し、非言語によるコミュニケーション能力も高まった。



<p>平成19年度(3年次)</p> <p>教科書で習った内容についてALTが質問をし、それに答える活動を行った。さらに個人の意見も求められるため、内容に対する深い理解を必要とする。</p> <p>評価のポイントは以下の4点である。</p> <p>(1) Pronunciation &amp; Fluency 20 points  (2) Grammar 20 points  (3) Mutual Understanding 30 points  (4) Content of the speech 30 points</p> <p>生徒には事前に評価ポイントを伝えてある。</p>	<p>以下は生徒による感想である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語で話すことの楽しさを感じることができた。</li> <li>・ 自分の考えを聞かれると考えをまとめるのに時間がかかって焦ることもあったが、考えを伝え、理解してもらえるとうれしい。</li> <li>・ 3年目にしてALTの言うことがだいぶ聞き取れるようになった。</li> <li>・ アイコンタクトなど、コミュニケーション能力が付いたと思う。</li> <li>・ とても緊張したが、英語力を付けたいと思うきっかけにもなった。</li> </ul> <p>〔課題〕 非言語によるコミュニケーションも大切であるが、自分の言いたいことをきちんと言葉で伝えることのできる、表現力が必要である。</p>								
<p>(11) 英単語の言い換えや教科書本文のリプロダクション</p> <p>平成17年度</p> <p>英語科1年の総合英語、普通科1年の英語で取り入れた。難しいことでも、自分の知っている英語を駆使して説明するスキルを養い、発信型スキルを高めることをねらいとした。各レッスンの新出単語に対する英語の説明文を選んだり、ペアでお互いに説明をしあう練習を重ねた。また、英文の内容に関する要約文を完成させる穴埋め問題を行ったあと、キーワードを使って教科書本文の内容をリプロダクションをする作業を口頭と筆記の両方で行った。</p> <p>平成18年度</p> <p>(全体)英語(総合英語)、英語(英語理解)、リーディングは和訳先渡しで本文の日本語の説明をなくし、基本的にオールイングリッシュで授業を行うことを英語科職員で確認し、実行した。英語、英語においてはペアワークを多く取り入れ、生徒の受信・発信能力の向上を目指した。</p> <p>(1年)1年生の全クラスで本文の内容に関するQ&amp;Aの後に、昨年度SELHi研究対象クラスで取り入れたキーワードを使って教科書の内容をリテリングさせる活動を取り入れた。</p>	<p>平成17年度</p> <p>〔成果〕口頭によるリプロダクションは、ペアで協力し合って行う方法をとったため、細かい間違いをお互いにチェックができ、学習への動機付けとなっているようだ。また、キーワードに注目させたことで、リーディングの時にキーワードを意識するようになった。</p> <p>〔課題〕英語の概要を説明することができるようになったと感じている生徒と、あまり感じていない生徒が二極化しているが、それは基本的な能力の差により生まれてきているため、英語が苦手な生徒に対するフォローが必要である。また、教科書の内容だけではなく、自分の意見も付け加えることで、発信型スキルを高める必要がある。</p> <p>平成18年度</p> <p>〔成果〕ペアワークを授業で多用することに対する生徒の意識は向上している。年度末のアンケート調査の結果は次の通りである。</p> <p>ペアワークがあると安心して勉強できる  「とてもそう思う」</p> <table border="0"> <tr> <td>1年 英語科</td> <td>普通科</td> <td>2年 英語科</td> <td>普通科</td> </tr> <tr> <td>44%</td> <td>25%</td> <td>70%</td> <td>18%</td> </tr> </table> <p>英語科でペアワークの効果を実感している生徒の割合が多く、その中でも研究対象クラスの2年英語科は高い数値を示している。普通科においても全クラスで共通のプリントを使って授業を行った1年生の方が高い数値を示した。</p>	1年 英語科	普通科	2年 英語科	普通科	44%	25%	70%	18%
1年 英語科	普通科	2年 英語科	普通科						
44%	25%	70%	18%						





(2年)英語理解の授業では、上記のようなリテリングに加え、自分の意見を英語で一文加える活動を取り入れた。英語科では、レッスンの終了後にALTによるインタビューテストを行い、内容の理解度や受信発信能力の伸びを検証した。

生活英語の授業では、一つの命題に対して、賛成・反対の両方の立場から考える活動を行った。ブレインストーミングをペアやグループで行った後、クラス全体で行い、そのキーワードを利用してミニディベートを行った。



選択・異文化理解の授業では、ディベートの基礎練習として「サーキットスピーチ」を行った。これは二つのグループが互いにスピーチを行い、最終的に相手のスピーチの内容を要約し発表するというものである。回数を重ねるにつれて、正確に聞き取り、要約できるようになった生徒も数名いた。

キーワードを使って教科書の概要を説明できるようになった。

「そう思う」

1年 英語科 普通科 2年 英語科 普通科  
52% 37% 50% 21%

キーワードを使ったリテリング活動は昨年度の英語科1年で効果が認められたので、今年度は英語科だけでなく普通科においても同じ指導法を取り入れた。

〔課題〕

(1年)リテリング活動において、教科書の内容だけでなく自分の意見をつけ加える生徒がまだ少ない。要約することで満足してしまう傾向がある。教科書と違う表現などを入れさせ、生徒の発信型能力の向上に努めたい。

(2年)インタビューテストでは、リテリングのための英文を暗記してくる生徒がいたため、実践的な英語力としての判断が難しかった。ALTの質問がわからないときの切り返し方がまだ弱いため、練習していく必要がある。ミニディベートでは、授業時よりもキーワードを絞って少なくしたために、口頭で文を言うことが難しかったようだ。また、必ず反駁するような練習を行ったが、論理的に相手の主張に対抗することがなかなかできなかったため、論理的思考を鍛える練習が必要である。



サーキットスピーチで身に付いたことを、実際のディベートにどのようにリンクさせていかをきちんと考える必要がある。また効果的なジャッジの仕方と、勝敗をどのように評価に結びつけるかを再考する必要があると感じた。

平成19年度

(1年) 英語 において引き続き和訳先渡しによるリテリング活動を取り入れるとともに、音読を重視した授業を展開した。

(2年) 英語理解の授業では、授業のはじめに1分間スピーチを実施した。トピックを印刷したプリントを配付し、その場で考え、ペアで発表という形式にした。ディスカッションに向けて、より多くの発話を促すことを期待し、昨年とは違うスタイルで授業のはじめに即興で与えられたトピックについて、それぞれが話すというスタイルをとった。トピックは「週末にしたこと」や「もし100万円もらったら何をするか」などである。はじめ1分間話し続けることに抵抗があった生徒も多いが、回を重ねると、何とか続けようという姿勢が見られるようになった。依然として文法的な誤りは多く見られるが、言いたいことをどう表現したらいいか考えるようになっている。また、互いに教えあう姿勢や、アイコンタクトをとり、身振り手振りを交えて伝え合おうという姿勢が身に付いている。また、英語科ではどんなトピックにするか関心を持つ生徒もいる。

レッスンの最後には昨年までのリテリングやサマリーに、グループで授業で学んだ内容に関して自分の意見を述べる活動を加えた。

(3年) 英語理解の授業では、レッスンごとのリテリングやサマライズに加え、内容に関して自分の意見を表現することで理解を深める練習を行った。また、インフォメーションギャップを利用したペアワークを取り入れることで、読みとった英文の内容を自分の言葉で伝える練習も行った。さらに、2学期には授業の導入としてのミニディベートや、命題について、賛成と反対の観点から様々な意見を出し合った後で、自分の意見を再構築する活動も取り入れた。その際には、キーワードを利用して考えを組み立てる方法を意識し、1年次から教科書のリテリングでやってきた方法を継続した。

平成19年度〔成果と課題〕

(1年) 1学期前半はリテリングの活動に時間がかかりすぎて、授業の進度がおくれがちであるが、2学期以降は少しずつ慣れてきてスムーズになってきた。

(2年) 自分の読んだ内容を伝える活動は、昨年度に引き続き行っているが、考えを述べることについては、生徒にとっては最初抵抗があったようだ。それでも何度かやっているうちに、人の使った表現などを使って伝えようという姿勢が見られるようになった。また相手の意見に耳を傾け、内容そのものに関することから表現に関することまで反応がよくなっている。今後は意見をより深めることや、文法的な間違いをどう扱うが課題である。



(3年) 教科書の内容を要約したり、一つの命題について賛成・反対の立場からディスカッションをし、最後に自分の意見をまとめる活動をするにより、対話型コミュニケーションの向上が見られた。スピーキングやライティングにおいて、辞書でひいたままの難しい表現を使用するのではなく、自分の知っている単語を駆使することをポイントとしたため、最初は難しくても、慣れてくるとコミュニケーションに対する抵抗が少なくなったようである。

(12) ミニディベートの実施

平成19年度

授業のはじめの5分を使って、自分の意見を述べ、それに対して反駁する練習

We should have recess. / We should do club activities outside school. / When we are sleepy, we should stop studying and go to bed. / Elementary school children should be allowed to have their cell phones. / Hospitals should have "baby hatch" or baby drop-off point / We should be free from school on Saturdays. / Students should take dance and martial arts lessons at junior high schools.

教科書の内容に関連している命題について、賛成・反対の立場から意見を述べ、キーワードを使って自分の意見を述べる練習

Voting age should be reduced to 18. / We should stop industrialization to protect the earth. / We should stop importing food. / We should use bioethanol.

選択・異文化理解の授業では歴史上の有名な人物について調べた上で、それぞれ英語でプレゼンテーションを行った。CleopatraやHelen Keller、Audrey Hepburn、Marie Antoinetteなど女性についてのものが多かった。生徒は歴史上の人物の生涯に関して、紹介した後で自分の意見や感想をお互いに述べ合った。

英語を目的とするのではなく、コミュニケーションツールとして、情報や意見を交換する事自体を楽しむことができるようになったのは成果である。以下は生徒による感想である。

- ・ 少数の英単語で文を作ったり、自分の言いたいことが言えるようになった。
- ・ キーワードがあるとサマリーが言いやすくなった。英文を忘れてしまっても、キーワードで簡単な英文を作ることができた。
- ・ 学んだ内容を深く理解できるようになった。
- ・ 最初は恥ずかしくて、相手の目を見て話すことができなかったが、3年生になると英語を話すことに抵抗がなくなって、アイコンタクトをしながらコミュニケーションができるようになったと思う。
- ・ 相手の意見を聞くことで視野が広がり、知識も増えた。
- ・ 意見を論理的に述べることができるようになった。
- ・ 英語を話したり聞いたりすることに抵抗がなくなった。自分の考えをその場で述べることができるようになった。
- ・ 英語に対し自信を付けることにつながった。

〔課題〕英語で意見を言うことに対する抵抗をなくするため、身近な話題を取り上げたり、資料を配付するという工夫をしたが、命題に対して自分で情報を集めたり、相手の反駁を考えて意見を組み立てるような練習をすれば、より本来のディベートに近い活動となっただろう。また、難しい表現を簡単に説明する練習を多く行ったが、洗練された英語表現を積極的に使用させる活動も有効であると考える。今後は、論理的思考の育成や表現力向上のために、国語科と連携し、英語力の向上につなげていくことも考えられる。



### (13) 英語集中セミナーの実施

平成17年度

9月26、27日に1年5組22名、ALT5名、JET2名で実施した。1日目はShow & Tellを行い、2日目はALTとのコミュニケーション活動、国際教養大学キャンパスツアーの後、国際教養大学教授による特別講義を受け、4技能を使用したコミュニケーション活動を、7名の学生と共に行った。キャンパスツアーではCILL: Center for Independent Language Learning(自主学習センター)を訪れ、パソコンでDVDを見たり、MDの音声を聴きながら、英語の雑誌を読んだりする機会も得た。



平成18年度

2年生英語科は6月、1年生英語科は9月に実施した。

(1年生) Show and Tellのコンテストをローテーション方式で行った。またALTとのコミュニケーション活動、国際教養大学のキャンパスツアー、国際教養大学の教授の授業を受けるなど、充実した2日間であった。

(2年生) ディベートを意識したスピーチコンテストを行った。一つの題材について肯定と否定の立場に分かれて意見を述べ、ALTによる評価と、生徒による投票で上位を決定した。また、授業で学んだ単語を英語で説明したり、ALTによるスキットを英語で説明したりと、英語の運用能力を高めるような活動を意識して行った。ALTとのコミュニケーション活動に加えて、国際教養大学の教授の授業を学生と共に受け、刺激を受けた。

平成19年度

18年度と同様の内容で2年生は6月、1年生は9月にそれぞれ1泊2日で実施した。

1年次

〔成果〕生徒を4～5名のグループに分け、各グループを一人のALTが担当したことにより、コミュニケーションがしやすかったようである。また、英語でしか通じないため、なんとか工夫して英語を話そうという努力が見られ、英語学習への動機付けともなった。また、国際教養大学の学生と交流したことで、日本人が流暢に英語を話しているのを見て、強い憧れを持ったとともに「自分もあのようにになりたい」という、英語学習のより具体的な到達イメージを抱いた生徒が多かった。CILLを訪れたことにより、楽しみながら英語を学習するさまざまな方法があると学ぶこともできた。

〔課題〕英語学習の動機付けとして、楽しくコミュニケーション活動ができることを目的とし、主に自分の事を語る場面が多かったが、ディベートにつなげるためにも、相手の言うことを聞いて自分の意見をまとめて表現する力を養うための活動も増やしていく必要がある。

2年次

〔成果〕スピーチは、自分の意見にかかわらず立場が決められたため、難しいと感じた生徒が多かった。その反面、「対抗することでやる気が出たし、違う視点からの意見を知ることが楽しかった」という感想も多く、英語を道具とした活動そのものを楽しむ姿勢ができてきたようだ。また、さまざまな活動を通して「英語力がついた」と感じた生徒が多く、英語で考えながら話す機会を多く与えたことにより、受信・発信のための英語の基礎力が養われた。

〔課題〕スピーチを細かいところまで聞き取ることが難しく、ディベートに向けて、その部分を質問できる練習をしていく必要がある。



## 7 3年間の英語コミュニケーション能力の向上について

### (1) Can-doテストにおける生徒の自己評価の変化について

英語能力に対する意識調査を平成17年度より年に2回ずつ行い、生徒の英語に対する意識の変化を検証した。SELHi 研究対象クラスである2005年英語科1年は、英語学習に対する意欲や自分の英語の能力、英語を学ぶ目的の各分野において、他のクラスと比べて意識が高まっていることが分かる。またスピーチやディベートを授業で取り入れ、様々な話題について英語で意見を述べ合う活動を経験したことで、英語で理解したり相手と討論したりする力も身に付き、英語のコミュニケーションに対する自信を深めたとも言える。もっと多くのことや微妙なニュアンスを相手に伝えたいという欲求が出てきたために、自分の英語力を高めたいという動機もかなり高まったようである。以下に伸びの顕著な項目を挙げ、別添資料にアンケートの全60項目を紹介する。

#### 意欲面

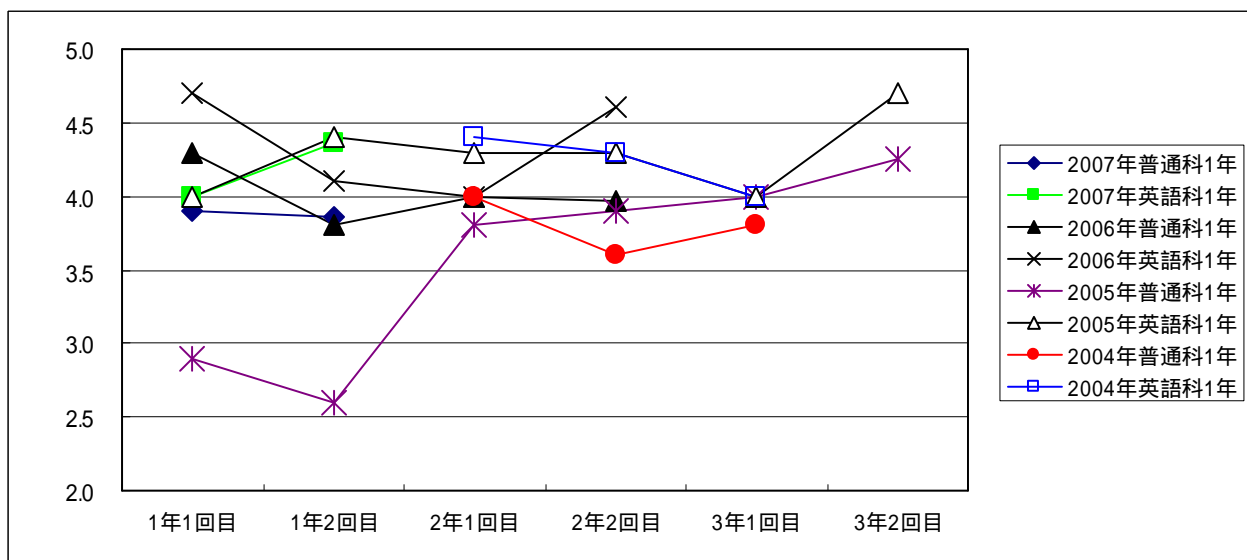
全くあてはまらない	どちらかと言えばあてはまらない	どちらとも言えない
だいたいあてはまる	かなりあてはまる	

#### (参考) 2007年度 Can-do 結果

勉強すれば、きっと英語の力は伸びると思う。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	3.9	3.9				
2007年英語科1年	4.0	4.4				
2006年普通科1年	4.3	3.8	4.0	4.0		
2006年英語科1年	4.7	4.1	4.0	4.6		
2005年普通科1年	2.9	2.6	3.8	3.9	4.0	4.3
2005年英語科1年	4.0	4.4	4.3	4.3	4.0	4.7
2004年普通科1年			4.0	3.6	3.8	
2004年英語科1年			4.4	4.3	4.0	

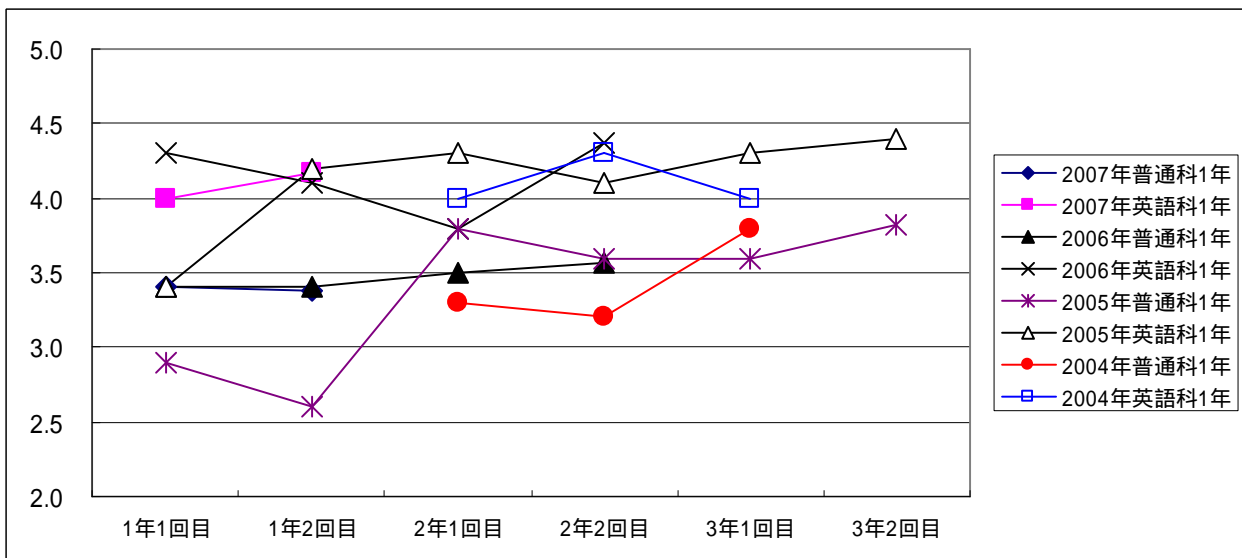
勉強すれば、きっと英語の力は伸びると思う。



自分の視野を広げるのに英語学習は有意義だと思う。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	3.4	3.4				
2007年英語科1年	4.0	4.2				
2006年普通科1年	3.4	3.4	3.5	3.6		
2006年英語科1年	4.3	4.1	3.8	4.4		
2005年普通科1年	2.9	2.6	3.8	3.6	3.6	3.8
2005年英語科1年	3.4	4.2	4.3	4.1	4.3	4.4
2004年普通科1年			3.3	3.2	3.8	
2004年英語科1年			4.0	4.3	4.0	

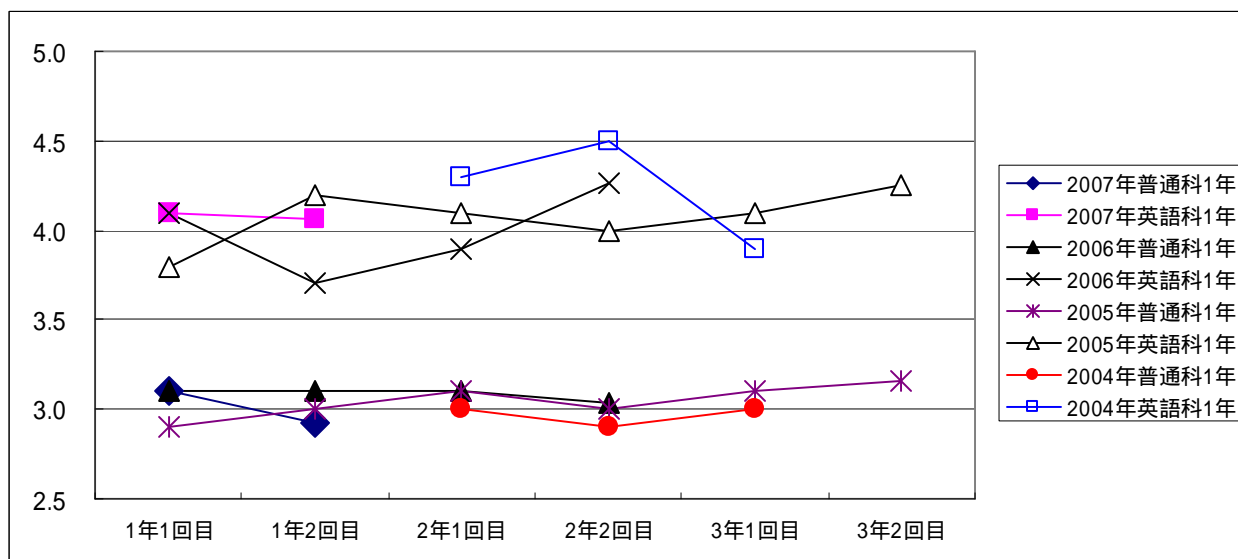
自分の視野を広げるのに英語学習は有意義だと思う。



英語を話す人たちとのやり取りに使いたいので勉強する。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	3.1	2.9				
2007年英語科1年	4.1	4.1				
2006年普通科1年	3.1	3.1	3.1	3.0		
2006年英語科1年	4.1	3.7	3.9	4.3		
2005年普通科1年	2.9	3.0	3.1	3.0	3.1	3.2
2005年英語科1年	3.8	4.2	4.1	4.0	4.1	4.3
2004年普通科1年			3.0	2.9	3.0	
2004年英語科1年			4.3	4.5	3.9	

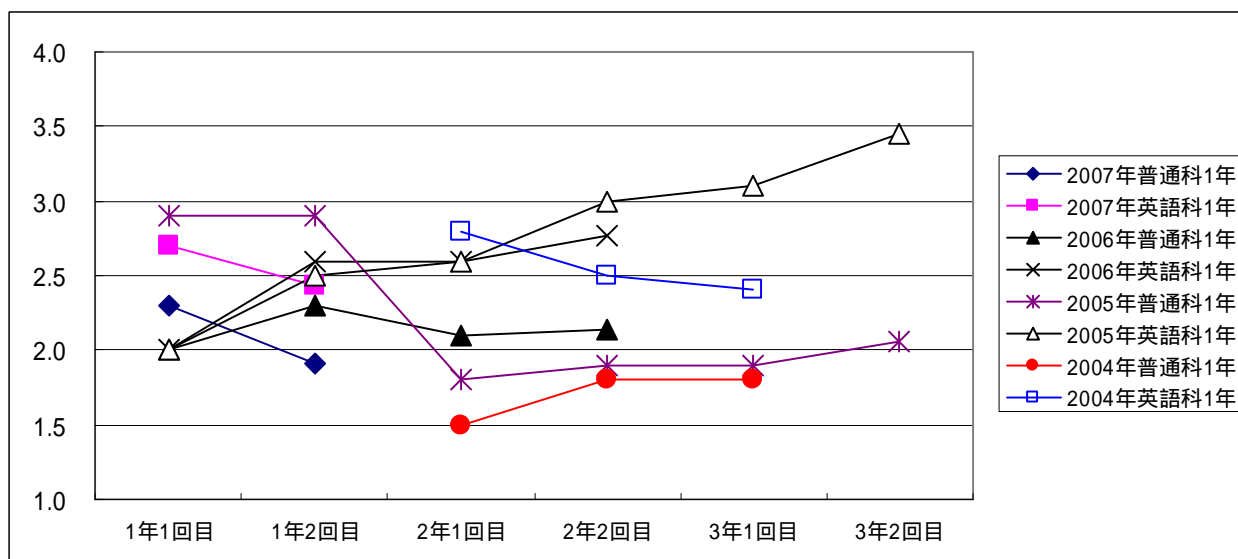
’ 英語を話す人たちとのやり取りに使いたいので勉強する。



幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考えながら)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)ことができる。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	2.3	1.9				
2007年英語科1年	2.7	2.4				
2006年普通科1年	2.0	2.3	2.1	2.1		
2006年英語科1年	2.0	2.6	2.6	2.8		
2005年普通科1年	2.9	2.9	1.8	1.9	1.9	2.1
2005年英語科1年	2.0	2.5	2.6	3.0	3.1	3.5
2004年普通科1年			1.5	1.8	1.8	
2004年英語科1年			2.8	2.5	2.4	

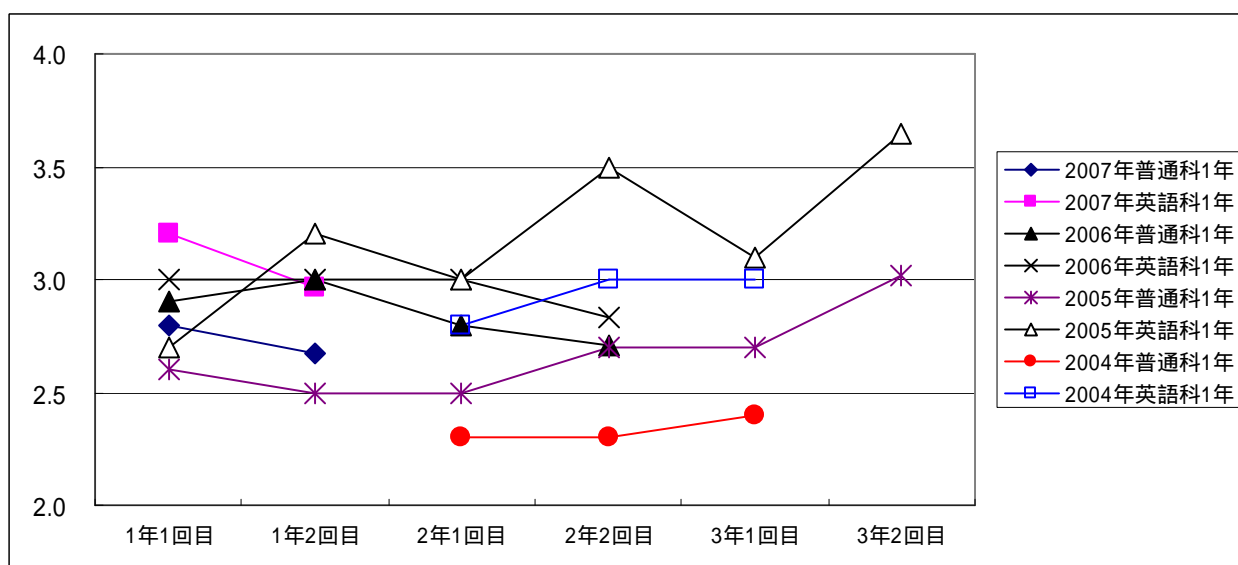
’ 幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考えながら)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)ことができる。



文章の中でポイントとなる語句や文、段落構成や展開などに注意して読むことができる。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	2.8	2.7				
2007年英語科1年	3.2	3.0				
2006年普通科1年	2.9	3.0	2.8	2.7		
2006年英語科1年	3.0	3.0	3.0	2.8		
2005年普通科1年	2.6	2.5	2.5	2.7	2.7	3.0
2005年英語科1年	2.7	3.2	3.0	3.5	3.1	3.7
2004年普通科1年			2.3	2.3	2.4	
2004年英語科1年			2.8	3.0	3.0	

’ 文章の中でポイントとなる語句や文、段落構成や展開などに注意して読むことができる。

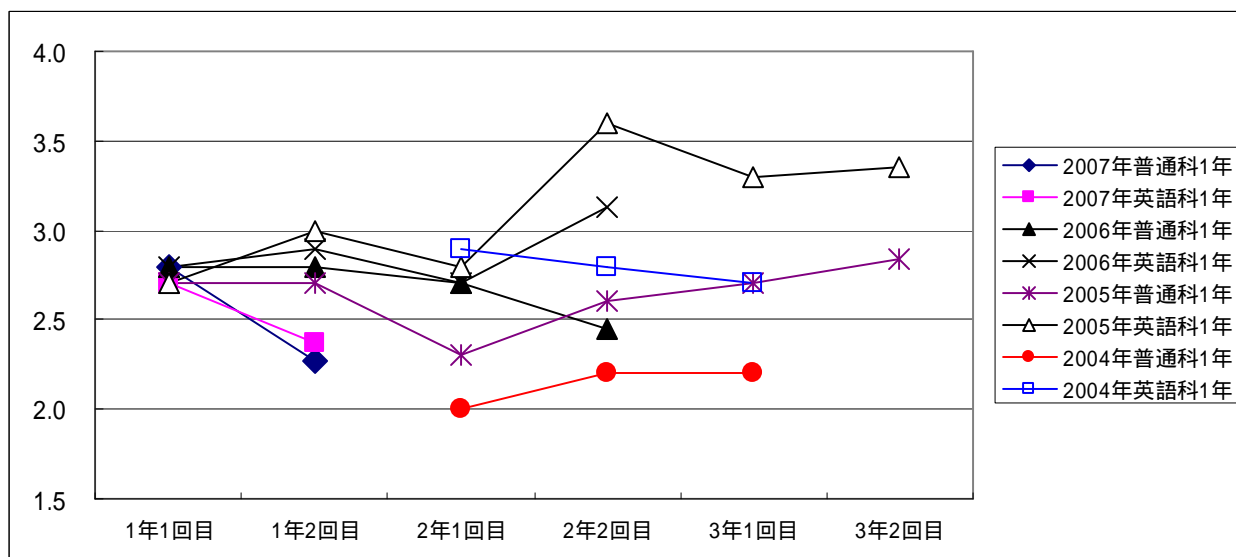


目的や状況に応じて速読し、概要や必要な特定情報を読み取ることができる。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
2007年普通科1年	2.8	2.3				
2007年英語科1年	2.7	2.4				
2006年普通科1年	2.8	2.8	2.7	2.4		
2006年英語科1年	2.8	2.9	2.7	3.1		
2005年普通科1年	2.7	2.7	2.3	2.6	2.7	2.8
2005年英語科1年	2.7	3.0	2.8	3.6	3.3	3.4
2004年普通科1年			2.0	2.2	2.2	
2004年英語科1年			2.9	2.8	2.7	



目的や状況に応じて速読し、概要や必要な特定情報を読み取ることができる。



## (2) 実用英語技能検定（準2級以上）合格状況

全校生徒における英語検定（準2級以上）の取得者の割合は次のとおりである。学校をあげて資格取得に取り組み、一定の成果をあげている。特にSELHi研究学年の平成19年度の3年生においては、取得割合の増加がみられた。

準2級以上 取得者割合（%）	1年	2年	3年	全校
平成17年度	8.9	23.7	32.1	21.1
平成18年度	13.6	25.7	32.9	24.6
平成19年度	8.0	20.0	35.2	21.6

## (3) 英語コミュニケーション能力テスト（GTEC）成績推移

### 3年英語科

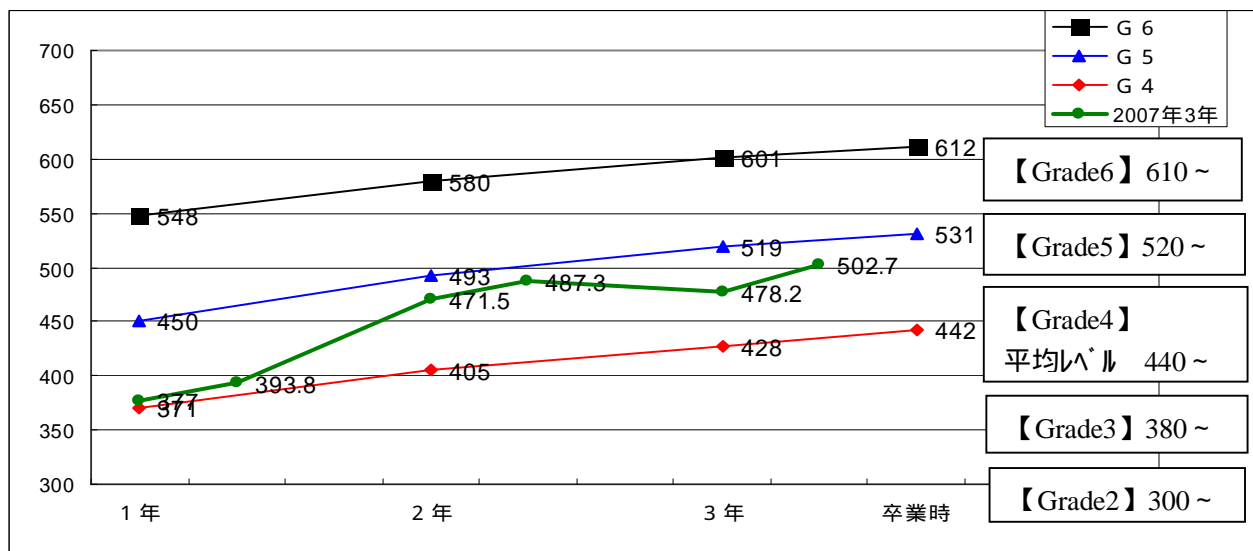
3年間で最も顕著であったのがリスニングの伸びであり、トータルスコアで、グレード6には5人の生徒が、グレード5以上にはクラスの半数の生徒が達している。これは1, 2年次の朝学習におけるラジオ講座の活用や、授業やSHRにおけるほぼオールイングリッシュの活動、英語による学級日誌、ミニディベートを通じて英語による対話の機会が多かったことの成果であると考えられる。また、スラッシュリーディングを通して教科書の英語を頭から理解する活動も3年間続けたが、後戻りをせずに意味をとっていく練習が、リスニングをする際の内容把握にプラスに働いたようだ。ライティングにおいては、2年次には題材に対する発想力に欠けていたためにスコアの減退が続いていたが、さまざまな話題について賛否両論を表現する活動を続けたため、3年次の最後には高いスコアを獲得することができた。3年間、英語で学級日誌を書き、必ず前のエッセイに対するコメントを添え続けたことも一つの要因だと考えられる。グレード5には5人の生徒が、平均のグレード4以上にはクラス全員が達し、レベルの向上が見られた。

(参考) 英語コミュニケーション能力テスト (GTEC for STUDENTS) 3年間の成績推移

**TOTALスコア**

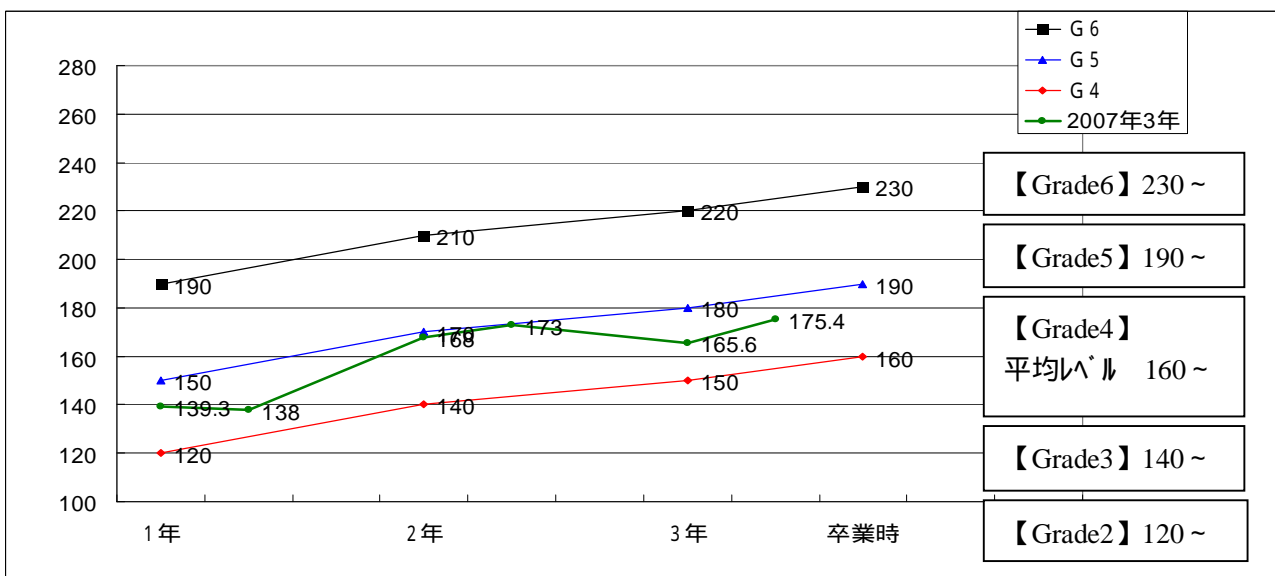
\* 2007年度英語科3年生

	1年		2年		3年		卒業時
G 6	548		580		601		612
G 5	450		493		519		531
G 4	371		405		428		442
2005年1年	377	393.8					
2006年2年			471.5	487.3			
2007年3年					478.2	502.7	



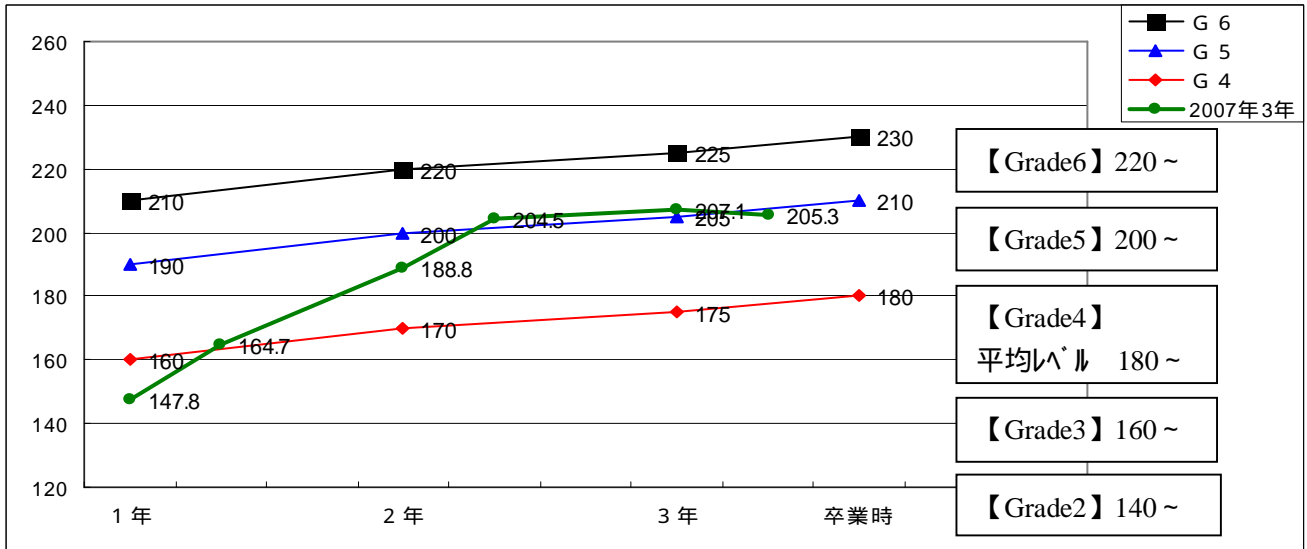
**READINGスコア**

	1年		2年		3年		卒業時
G 6	190		210		220		230
G 5	150		170		180		190
G 4	120		140		150		160
2005年1年	139.3	138					
2006年2年			168	173			
2007年3年					165.6	175.4	



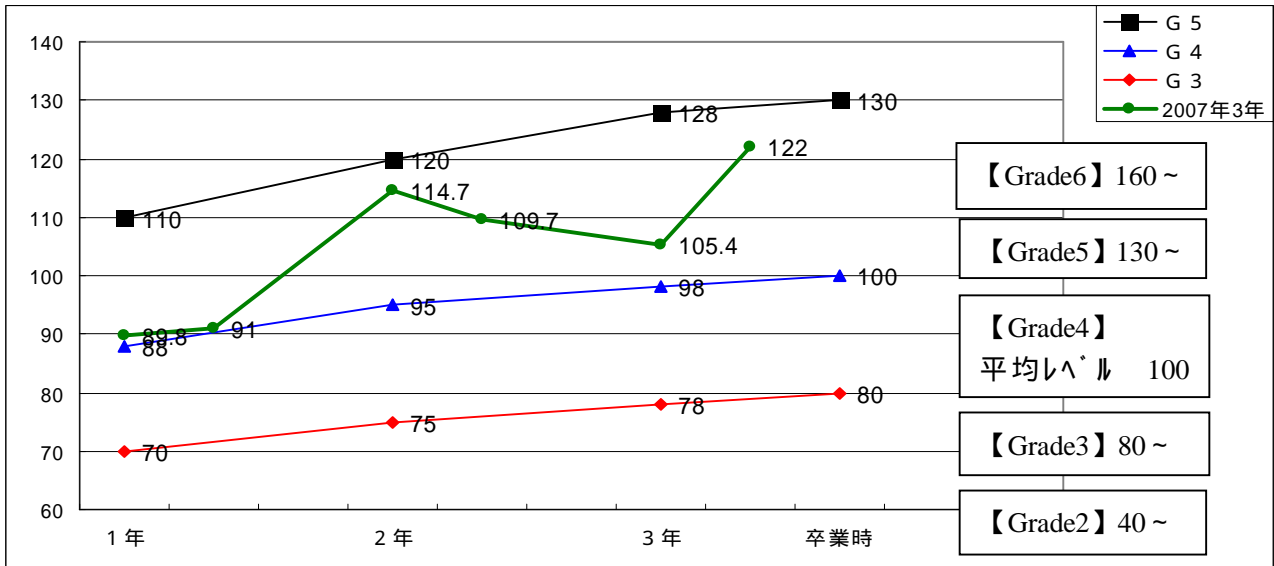
## LISTENINGスコア

	1年		2年		3年		卒業時
G 6	210		220		225		230
G 5	190		200		205		210
G 4	160		170		175		180
2005年1年	147.8	164.7					
2006年2年			188.8	204.5			
2007年3年					207.1	205.3	



## WRITINGスコア

	1年		2年		3年		卒業時
G 5	110		120		128		130
G 4	88		95		98		100
G 3	70		75		78		80
2005年1年	89.8	91					
2006年2年			114.7	109.7			
2007年3年					105.4	122	



## 8 校内の英語教育（特に授業）の改善状況

### （１）第１年次（平成１７年度）

SELHI研究指定を受け、教員の意識改革が進んだことが一番大きいと思われる。それまで英語科の教科部会が不定期に行われていたのを、SELHI指定を期に、毎週金曜日の６校時に固定し、定期的に授業改善に関する話し合いの時間を確保することができた。使用教材や指導法について共通理解を図るとともに、研究計画の実施について教員が様々なアイデアを出し合い、計画を進めることができた。

普通科１年の英語、２年の英語、英語科１年の総合英語、及び２年の英語理解において、和訳先渡し授業を実施し、日本語による内容確認の時間を極力少なくするとともに、授業中の英語を使ったペア活動等を多く取り入れ、生徒の英語力の向上に努めた。授業中の教師の英語使用量も以前に比べて格段に増え、SELHI研究指定クラスでは総合英語の授業において、ほぼオールイングリッシュで授業が進められている。

生徒の受信能力の向上を目指し、１・２年生全クラスで音読スタンプカードを新たに導入し、音読指導を重視するとともに、授業中においてもシャドウイングを徹底して行った。１年生においては、全クラスでShow & Tellを実施し、生徒が自分の大切な物や人について、実物または写真を見せながら英語で発表した。できるだけ平易な表現を用いて相手に自分の考えを伝えることに重点を置き、発信型スキルを高めることがねらいで、大きな効果があった。

### （２）第２年次（平成１８年度）

前年度から実施している和訳先渡し授業を１・２年生の全クラスで継続して行った。日本語による説明をなくし、授業中の生徒のペア活動を多く取り入れるようにした。授業もオールイングリッシュを基本にすることを確認し、昨年度はSELHI対象クラスだけであったが、英語（総合英語）英語（英語理解）においては、全クラスにおいて基本的に英語で授業を進めることができた。生徒の英語使用量も増加しており、英語を使用することに対してあまり抵抗がなくなってきた。音読スタンプカード、マッピング、シャドウイングなど音読を重視することも英語科内で確認され、授業で実践されていることも効果を上げた。

前年度SELHI対象クラスで効果が認められたキーワードを使ったリテリング活動は今年度１年生全クラスに取り入れた。習熟度クラスでは生徒の能力に応じて指導法に多少バリエーションを加えながら、授業が終わったときに生徒の頭にできるだけたくさんの英語が残るような授業を心がけ、生徒の受信と発信の両方を促すような活動を心がけた。

SELHI研究対象クラス（英語科２年）においては、対話型コミュニケーション能力の向上を目指し、賛成・反対それぞれの立場から意見を述べる活動を意識して行い、サーキットスピーチやミニディベートを授業で行った。意見を交わすための社会的な基礎知識や論理的思考がまだ不十分なために、深い議論を交わすところまではまだ達していないが、生徒は相手の意見を聞き、自分で考えて、発言するというサイクルに少しずつ慣れてきた。

### （３）第３年次（平成１９年度）

研究対象クラス（英語科３年）においては、レッスンごとのリテリングやサマライズに加え、内容に関して自分の意見を表現することで理解を深める練習を行った。また、インフォメーションギャップを利用したペアワークを取り入れることで、読みとった英文の内容を自分の言葉で伝える練習も行った。さらに、２学期にはミニディベートや、命題について賛成と反対の観点から様々な意見を出し合った後で、自分の意見を再構築する活動も取り入れた。その際には、キーワードを利用して考えを組み立てる方法を意識し、１年次から教科書のリテリングでやってきた方法を継続した。

１年生においてはキーワードを使ったリテリング活動を継続するとともに、音読を重視し、ペア活動を取り入れて、教科書の内容の定着を図った。２年生でも前年度までの指導を継続し、１分間スピーチで発信型能力の向上を目指した。

## 9 研究開発組織について

平成17年度

### (1) 第1回 SELHi 運営指導委員会 平成17年7月22日(金)

#### SELHi 運営指導委員

- 阿部 祐子 氏 (国際教養大学 国際教養学部 助教授)  
渡部 良典 氏 (秋田大学 教育文化学部 助教授)  
米田 進 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 上席主幹)  
吉原 慎一 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 主任指導主事)  
安井 信雄 氏 (能代北高等学校 学校評議員)

#### 協議内容

- ( ) SELHi だよりについて  
英語での情報提供も視野に入れ、日本語だけでなく、英語で作っても良い。  
生徒自身の手で作ることで、生徒の意識向上、ライティング力の向上にもつながるのではないかと。
- ( ) 世界史・家庭科の英語による授業  
何を指すのか、何を目標にするのか、指導のねらいをはっきりさせることが大切である。  
各科目の目標との関連性も考慮に入れる必要がある。  
独自の教材の開発も視野に入れて取り組んではどうか。海外の小学校の教科書などが参考になる。
- ( ) 異文化理解について  
何かを体験させて、自分にとってそれはどういう意味を持つかを考えさせることが大切。
- ( ) 姉妹校・大学との交流  
位置づけ・ねらいを明確にする事が必要。  
交流の前後の変化を記録し、生徒の変容を明らかにする。
- ( ) 研究の評価について  
外部テストだけでなく、何を指すのかを考え、具体的な指標で比較・検証することが大切である。  
VTR等で生徒個々の記録を取ること。  
評価の基本は、前後の変化や達成度、満足度を測るもの。継続性が大切である。

### (2) 第1回 国際教養大学EAP教員による教員対象のワークショップ

平成17年9月16日(金)

- 指導助言者 アル レーナー 氏 (国際教養大学 国際教養学部 助教授)  
佐藤 健公 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

#### 指導助言

- ・教師と生徒との良い関係ができていて、クラスの雰囲気にも現れていた。生徒たちは授業のまとめを自分自身の英語で作ろうと、よく頑張っていた。文法についてだが、必要以上に文法用語(「強調」だとか)を使わない方がいいと思う。
- ・フラッシュカードを用いるのはとても良い方法だ。中学校でもよく使う手法である。また、深沢先生は生徒に同じ質問を何度もして、定着させようとしていた。
- ・授業の中で、最小限の日本語しか使っていなかった。クラスには活気があって雰囲気も良く、大

変よかった。生徒たちは、教師のやり方を理解しており、それに迷うことなく従っていた。彼らには英語の力の差があることも感じた。教師側の間違いを生徒が指摘したのが、日本では珍しい。お互いの関係がよくできている証拠であろう。

- ・英語を話す、日本人の先生は生徒にとってすばらしいロールモデルになる。教師自身がモデルとなるべきだ。教師側からのエネルギーが、生徒を学びたい！という気持ちにさせる。教師自身がモデルとなって生徒に刺激を与えるべきである。Take 10 minutes - 毎回10分の生徒を動かす時間を作る。これが積み重なるとかなりの時間になるし、生徒たちは英語を話すことになれていく。秋田県の英語教師はすばらしい能力を持っている。持っている知識や能力を、クラスや学校によって使い分けていく力が必要になる。また、5分間で生徒にペアでFree talkをさせてはどうか。異なるトピックについて話すことを続けていると、確実に生徒は力を付けていく。

(3) 文部科学省SELHi実地調査 平成17年11月1日(火)

指導助言者 金谷 憲 氏 (東京学芸大学 英語科教育学研究室 教授)

指導助言

- ・授業の印象は、授業の中で教師が自然に英語を使って授業を進めており、生徒に取っても受け入れ易いのではないかと思う。今の段階ではこのままで良いのではないか。総合英語(英語)の授業に関しては、黒板にキーワードを貼り、教科書本文の要約をそれを見ながら言わせるというスタイルが、群馬県のSELHiの館林女子高校と非常に似ている。1年目はインプットの量を多くすることが大切。教師の説明や発話を少なくし、生徒の活動を少しずつ増やしていく工夫を考えていてもらいたい。
- ・研究テーマを見る限り、問題になるのは「発信型」の部分であるように思われる。英語で自己表現させることをあまり難しく考えずに、考えたことを雑談でもいいので、英語で言えるような生徒を育てることを目指して研究を進めてほしい。研究の最終目的は「能代北高方式」のような指導のスタイルを確立することである。成功例だけでなく、失敗例も紹介してもらいたい。何が原因でうまく行かなかったのか、それを分析して紹介する事で、それも立派な研究成果に成りうる。
- ・評価に関しては継続的な記録・分析が必要である。業者テストなどの数値データはもちろん有効ではあるが、数値だけでなくデータの質的な部分も大切である。例えば、生徒の様子を一人ずつ定期的にビデオテープに撮り、その変化を見るのも良い。生徒の変化を記録するように心がけてほしい。
- ・受験対策としての指導は、3年生になってからでも良いと思う。文法事項の説明などは、二つか三つのLesson分を一度にまとめてやるのも一つの方法である。日常の授業とSELHi研究の整合が図れるように意識して、頑張ってもらいたい。
- ・メールでの海外との交流、英語以外の教科を英語で指導する、などの研究はあまり構えずに様々な機会を通してやっていっても良いのではないか。機会を増やすことで、生徒が英語で活動することに慣れていくことが大切である。大学などの外部講師の特別講義に関しては、事前・事後の指導も大切。

(4) 第2回 国際教養大学EAP教員による教員対象のワークショップ

平成17年11月29日(火)

指導助言者 アル レーナー 氏 (国際教養大学 助教授)

参加者全員によるディスカッション

- ( ) What is the most persistent question you face in teaching English?
- ( ) What is your greatest worry (concern) about teaching English?

( 5 ) 第 2 回 SELHi 運営指導委員会 平成 18 年 2 月 1 日 ( 水 )

SELHi 運営指導委員

- 阿部 祐子 氏 ( 国際教養大学 国際教養学部 助教授 )
- 渡部 良典 氏 ( 秋田大学 教育文化学部 助教授 )
- 米田 進 氏 ( 秋田県教育庁 高校教育課 上席主幹 )
- 吉原 慎一 氏 ( 秋田県教育庁 高校教育課 主任指導主事 )
- 安井 信雄 氏 ( 能代北高等学校 学校評議員 )

協議

( ) 今年度の問題点と対策について ( 発言順 )

吉原氏 : 3 年間のシラバスと、実際の取り組みの整合性を確認すべき。

米田氏 : シラバスの表現を統一すべき。

生徒側から見た表現なのか、教師側から見た表現にするのかそろえる。

目指す生徒像を意識した表現にすること。

渡部氏 : Can-do Statements には出典を載せ、学校側で変更した部分があれば明記すること。

また、小テスト等はどんなテストでどんな結果だったかすべてファイルし、ポートフォリオ形式で全部まとめるべき。

阿部氏 : 研究開発課題として、「異文化理解」に関する項目があるので、どのようなことを行ったのか項目として追加した方がよい。

安井氏 : 英語での学級日誌については、英語で書いたものを次の段階にどう発展させていくか考えるべき。評価しながら、次へとつなげていく。

発音指導は、最初は強制的にでもやらせるべきと考える。英語独特のリズムや、英語流の考え方が身に付くのではないだろうか。

多彩な取り組みで頼もしく思う。生徒たちが生き生きと育ってほしい。それこそが SELHi の基本理念である。

吉原氏 : 音読マラソンを普通科も実施しているようだが、よいと思う。スタンプのみでなく、きちんと評価をすることが大切であると思う。

口頭練習から書く作業につなげるために、Review でしゃべらせ、それを書かせるなどする。プラスワンの課題を与えることで、覚えたことが次に生かされていく。

学級日誌は、他の生徒が書き込むことができるようにしてはどうか。英語でコメントを書くルールを作ると、日常作業として位置づけられるし、何よりおもしろい。

米田氏 : 研究開発課題と、日常の授業との関わり合いはどうか、どう結びついているのかを明示すること。各科目の年間計画を立てるとき、しっかりと見通しをたて授業を行うことが大事だ。

渡部氏 : 様々なものが、入りすぎているという印象を受ける。今年は「これ」に向かって行う、という抽象的ではなく具体的な到達目標が必要だ。「英検」を目単なる目標とするのではなく、何故英検 ~ 級なのか具体的に。

音声に力を入れているが、それだけだと間違いなどを見過ごすことがあるので、確認の意味もこめてライティングで活動をしめる形をとってはどうか。

阿部氏 : 到達目標として、異文化理解をどうはかるか、もっとかみ砕いて具体的に。

発音・流暢さも大事だが、最近では美しい発音だけが主流ではない。コミュニケーションに重きを置いた授業を。

( ) Can-do Statement について

Q：生徒の意識の伸び・変化を見ようと、2回実施しているが、どう有効に生かしていくべきか。

米田氏：集団の特徴・特性があるかという分析をしてはどうか。

授業評価アンケートと結びつけ、授業をどう変えていけばよいのかが分かるようなアンケートを作成してほしい。

安井氏：一人一人の子どもの反応の変化・評価も合わせて見られるようにしたらどうか。

高橋教諭：金谷先生からも助言をいただいたが、一人一人の生徒の変化を把握するために、テープ録音・ビデオ撮影を実施している。

渡部氏：次年度も継続する場合は、教師たちで判断し簡素化していく必要がある。

数値の誤差がないように、項目をそろえた方が正確である。

自己評価と教師側の評価をレーダーチャート化し、重ねて比較する。

韓国語に翻訳し、姉妹校の生徒にも同じものを作ってもらい比較する。

SELHiではない地域の高校に頼んで調査してもらい比較する。

平成18年度

(1) 第1回 SELHi運営指導委員会 平成18年11月14日(火)

SELHi運営指導委員

阿部 祐子 氏(国際教養大学 国際教養学部 助教授)

佐々木 雅子 氏(秋田大学 教育文化学部 助教授)

高井 真純 氏(秋田県教育庁 高校教育課 上席主幹(兼)班長)

木村 郁 氏(秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

安井 信雄 氏(能代北高等学校 学校評議員)

協議内容

( ) 研究授業・今年度の計画について

- ・1分間スピーチでは未知の英語が飛び込んでくるよい機会である。生徒変容の資料が必要である。もっと効果的に活用できないか検討してみてもどうか。
- ・ペアワークやグループワークは何を目標とさせて行うかが肝心である。
- ・日本語をなるべく入れない授業を心がけてほしい。意味が分かるからできる活動もある。生徒自身が自分の英語で表現する機会を増やす。授業の中で他人とのコミュニケーションがとれているか。1分間スピーチでは聞く方もしっかりと聞かなければならない。
- ・発見するプリントを作成する。Mindmap を用いた授業の効果を検証してほしい。生徒の元気が必要である。特に1年生の元気がない。
- ・フラッシュカードの基準はどこにあるのか。和訳先渡しは日本語の情報が多すぎて効果が半減するのではないか。
- ・生徒からの発信はあるか。なぜ、リテリングを最初に行わないのか。Memorize& Reproduce では物足りないのではないか。
- ・オーストラリアとリアルタイムで授業をしてみたらどうか。授業での発信はCreative, Dynamic, Authentic, Real でないといけない。



(2) SELHi 教員研修 平成18年11月27日(月)

指導助言者 金谷 憲 氏 (東京学芸大学 英語科教育学研究室 教授)

指導助言

- ・授業のスタイルは館林女子高校と良い意味で酷似している。
- ・2年5組は研究対象クラスとして着実に進歩している印象がある。生徒が自信を持って授業に参加していて、常に顔が上を見ている。しかも教師の英語をきちんと理解している。もっとも成長が見られる点は、長いセンテンスをインプットし、それをアウトプットする能力が身に付いているということである。
- ・リテリングをさせる場合にいくつかのやり方をミックスさせてみてはどうか。例えば、「最初に本文を平易な英語で言い換えさせ、発言させてからまとめさせる」手法を使ったり、時にはその逆を使ったりすればマンネリ化した感じは薄れるのではないかと。また、パラフレーズした平易な英文は「話し言葉」として扱い、教科書の英文は「書き言葉」として扱えば良いのではないかと。1年生の基礎クラスは現段階ではリテリングはちょっと厳しい印象があるので、前段階としてもっと基本的な練習をしてみてもどうか。
- ・ディベートに関しては、あらかじめスクリプトが決まった(ディベートではなくなってしまうが)ものを演じさせてみることもよいのではないかと。また、ディベートのトピックは生徒にとって身近なものを選び、「仮にレベルの低い内容であっても臆さず話してみなさい」という雰囲気を、教師側がいかにつけてあげられるかがポイントになるだろう。
- ・全体的な意見として、本文の内容チェックをするための問いの英文に不自然な箇所が見受けられる。また、語法を学ばせる際は、できるかぎり英文で提示すべきである。例えば、save A B「AのBを省く」のような説明は極力避けなければならない。クラスの雰囲気作りに関して言えば、ライティング活動の最中にBGMをかけたりすれば雰囲気が和むのではないかと。

(3) SELHi 授業公開 研究協議会 平成19年2月22日(木)

SELHi 運営指導委員

佐々木 雅子 氏 (秋田大学 教育文化学部 助教授)

高井 真純 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 上席主幹(兼)班長)

木村 郁 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

安井 信雄 氏 (能代北高等学校 学校評議員)

SELHi 研究進捗状況報告(資料集参照)

「対話型コミュニケーション」を目標とし、受信力から発信力へという流れで、一年目は受信に重点を置いた活動をしている。和訳先渡しで、オールイングリッシュで、キーワードを用いたりプロダクション・リテリングを共通の流れとし、学年や生徒の実情に合わせて、リテリングの方法を考えていくことにしている。また、研究対象クラスはディベートの導入として、賛成反対の立場から意見を言う活動をしている。

#### 【質疑応答】

Q: オールイングリッシュの授業における生徒の理解度はどの程度だと思うか。

音読スタンプカードのチェックはどうしているか。

鈴木教諭: 年度当初は抵抗があったようだが、英語を使い続けたことで、抵抗はなくなったのではないと思う。スタンプカードは課が終わるごとに集めて、スタンプを押したり、コメントを書いたりしている。またSELHi だよりに回数の多かった生徒の名前を

載せるなどしている。

Q：発表活動には、書いて準備する段階のエラーフィードバックはどのようにしてやっているか。

高橋教諭：間違いはある程度は直すか、すべて直すことはしない。なるべく肯定的なコメントを書いて返却するようにしている。

深沢教諭：文法を考えるきっかけとして、あまりにも変な文章を集めて、プリントを作成し、どこがおかしいか考えさせたり、お互いに交換してチェックさせたりしている。

Q：日常的に生徒の考える力や論理性が伸びていることを評価する方法はあるか。

高橋教諭：評価するという段階まではしていない。生徒の書いたものをチェックしている。

Q：音読を継続させるためにどんな工夫をしているか。またどのように時間を割いているか。

朝学習のラジオ講座は学んだスキットをどのように評価しているか。

高橋教諭：音読の方法は様々なバリエーションがあるが、生徒のレベルに合わせて、授業中に実施するのが基本で、1年生のLLの授業では生徒がテープに吹き込んだものを評価している。

深沢教諭：昨年の英語科1年生は人数が少なかったため、レッスンが終わるたびに、ALTのところへ行って、音読を聞いてもらい、評価してもらっていた。朝学習で実施しているラジオ講座は、学んだ表現を用いて授業中にスキットをさせたり、重要表現はテストで確認するなどしている。

Q：個々の発音の指導はどうしているか。どの程度まで評価し、矯正しているか。

深沢教諭：最初は細かく指導していたが、実際のところ発音は矯正されていないのが現状で、聞いてわかる程度の発音を目標とし、ALTが自然かどうかを判断基準としている。

#### 公開授業について

##### ( )【授業者から】

鈴木教諭(普通科1年 発展クラス): 発展クラスではあるが基礎力が定着していない状態。リプロダクションの活動に焦点を当てている。「対話型」ということで、自分の考えを述べたり、それについてお互いに意見交換したりすることがこれからの課題である。

高橋教諭(普通科1年 標準クラス): キーワードを提示するまでは発展クラスと同じ流れで、その後、すぐに発表ではなく一度書かせることにしている。書くのは速くなってきているので、今後は書かず口頭で発表させるようにしていきたい。

山崎教諭(普通科1年 基礎クラス): 頑張っているが英語が苦手な生徒が多い。飽きさせないことを心がけている。サマリーを書く活動についてはなかなか難しく、今日は穴埋めの形式を用いた。最後はペアで読んで、重要な表現の確認をする。

深沢教諭(英語科2年): 1年生の終わりにディベートをやってみたが、反駁するための論理的思考力が欠けているのでうまくいかなかった。論理的思考力を養うため今日のような簡単な形式を用いることにした。1分間スピーチでも意見を言わせるようにしているが、なかなか反対意見というのは出ないので反駁の練習をしている。授業ではキーワードを使ってリテリングをしているので、今回のレッスンは言語をテーマとしたディベートということもあり、より身近な方言を取り上げて、今回の形にした。どのようにして論理的思考力を身に付けさせるかが課題である。

##### ( )【質疑応答】

Q：習熟度別クラスについて進度とクラス替えはどうなっているか。

プリントは学年で統一したものを使っているのか。

2年生の授業で使っているプリントを見ると、事前に生徒が記入しており、先生のチェックも入っているが、準備にどれくらいの時間をかけているか。

鈴木教諭：進度は多少違っているがテストは同じものになっている。発展クラスでは、課が終わると英作文などをやっている。クラス替えは担当者によって授業の進め方が多少異なるので、1回だけしかやっていない。テストが終わったときの成績で決定している。プリントは、パソコンの共有フォルダに入れておき、それぞれが加工して使っている。もとのプリントは担当者が一人で作っているが、今後は意見を出し合い改良していかなければと思っている。

深沢教諭：今回の授業に関しては、前の授業45分間で肯定と否定について、ブレインストーミングし、意見を書かせた。ALTがチェックし、その後、私が見てキーワードをALTと相談するのに、約1~2時間費やした。

Q：生徒の反応がとても良く、家庭学習をしっかりやっているのではないかと思ったのですが、家庭学習で力を入れていることは何ですか。

鈴木教諭：授業では音読とリプロダクションに力を入れたいので、プリントを事前に配付し、あらかじめ本文を読んで、質問に答えるところまでやってくることになっている。音読は具体的な回数を上げて指示している。

高橋教諭：標準クラスでは授業でプリントを配付している。予習としては、単語を調べてくることを課している。

山崎教諭：プリントは授業中に配付。予習ノートを見開き2ページをできるだけやってくることにしている。

深沢教諭：授業のときにプリントを配付し、速読として質問に答えさせている。復習に力を入れていてチャンクごとに英文を載せたプリントで、頭から日本語にしていったり、英語にしていったりを家庭学習にしている。音読させるために、新出単語やイディオムを抜いた本文を用意したり、目標タイムを設定し記録させたりしている。やれば必ず点数が取れるような定期考査を作っている。今後はキーワードを抜いて、意味を考えながら読むためのプリントを作らなければならない。

Q：訳先渡しをしていて、なぜこんな訳にやるのかという生徒からの質問はないか。英文の構造を説明しなければならぬという状況はおきないか。

山崎教諭：構造の部分に全くふれないということはできない。その課で重要なところだけを取り上げている。すべて説明するとついてこられない生徒がいる。できるだけ精選して、覚えてほしいものだけにしている。

Q：論理的思考力育成の観点から、英語以外の科目での英語による授業について教えてください。

高橋教諭：昨年度は世界史Bと食文化、異文化理解で実施した。ディベートを意識した世界史Bというよりは、通常の流れの中での授業だった。この授業については、どのように英語力をつけるか、論理的思考力をつけるかは課題である。

Q：SELHi 学年というところ、そこだけ特化してしまい共通理解を持ちにくいということはないか。

高橋教諭：SELHi 対象とそうでない学年のギャップに関しては、2年生は英語科とそれ以外に授業のやり方に違いはあるが、1年生全体に関しては2年生英語科の後を追って、授業を考えている。

Q：書いたものや音読の成果をどのように評価しているか。

鈴木教諭：実際に書いたものを提出したということで評価している。

高橋教諭：OCの授業で評価している。テープに吹き込んだものを提出させて、A~Eで評価している。音読スタンプカードについては、回数を得点化してはいない。

深沢教諭：肯定・否定を考えさせる授業については、考査はエッセイ形式の試験にしようと思って

いる。また、内容をリテリングさせる試験もALTにやってもらっている。

( )【指導助言】

高井氏

生徒が自ら考えるための発問か、生徒に考えさせる説明か、生徒自身がどこでつまづいたのかがわかるヒントか、生徒の答えを全員で共有する場面があるかどうか、という4点をポイントに授業を見たが、バランスの取れた雰囲気の良い授業だった。

深沢先生の授業では、生徒中心で生徒が授業を作っており、教師が生徒の発言に対して、不十分なところを補い次につなげていくような展開で、生徒は先生の指示によくしたがっていた。異文化理解というと、とかく外国と考えてしまいがちだが、日本人同士でも異文化というのはあることで、人間同士の理解を発見し、学んだ授業だった。

SELHi 研究としては、学校全体としてどのように分析・評価していくか、それをどう還元するか研究を深めてほしい。また、高大連携は進んでいるようだが、中高連携が今後の課題である。

佐々木氏：

能代北高の授業は、empathetic と interactive という英単語で表せる。生徒とうまくかわり、導き、インターアクションを大切にしている。ただし、インターアクションが教師から生徒への働きかけの部分が多いので、生徒から教師へ、生徒から生徒へのインターアクションをどう引き出すかが課題である。この解決策として、「対話型コミュニケーション」のためのシーティングアレンジメントの工夫などが考えられるのではないか。

細かく緻密に授業が展開しすぎると、堅苦しくなるので、生徒の language learner としての側面だけでなく language user としての面を強調してもいいのではないか。学級日誌や英語による SHR は user としての面だが、授業でも考えてほしい。

論理的思考力については、立場を明確にして、理由を述べることも必要だが、inter-personal の部分がプロセスとしてあってもいいと思う。

日本語訳については、いいところもあれば、考えなければならないこともある。ディスコースレベルで用いるときは注意が必要。直読直解できることでも、日本語が介在するとスタートに戻ってしまう恐れがある。

分析については、量的な部分だけでなく、質的な分析をしてほしい。日記風に書いたものを分析することで、学習者の発達度合いや学習に対する変化、論理的思考力がわかる。

音読については、頑張った先に何があるのかゴールを明確にすることで、その活動が有意義なものなるのでは。

木村氏：

来るたびに、生徒が向上している。生徒の変容を手助けすることが、われわれの仕事である。1年生では、ほぼ同じようなねらいを持って授業していることが良い。どのような生徒を育てたいのか目標を共有し、協同していくことに意義がある。1年生の授業は昨年度の英語科の授業で実施したリテリングをうまくフィードバックを受けながら進めており、生徒は確実に育っている。今後は、普通科としての最終的な到達目標をどこに持っていくのかプロセスを考えてほしい。

2年生の英語科では、3か月前には教科書を使ってリテリングしていたが、「対話型コミュニケーション」を目標とし、それにつながるディベートを達成できるかどうかは不安があった。しかし、今回、1分間スピーチでも生徒はアイコンタクトを保っていたし、質問をする生徒もそうだった。この研究の最終的な目標は、「対話型コミュニケーション」である。ディベートは通常のコミュニケーションとは異なるもので、ディベートというものをもう少し考えてみていいのではないかと思う。

安井氏：

生徒が何をすればよいかわかって、授業の流れにうまく乗っている。生徒の間違いをどのように扱うかは非常に大切なこと。積極性を養うためにはあまりミスを指摘されると意欲をそぐことになる。何が当面の目標であるかを明確にして指導する必要がある。

文法や構造などに関する知識のあるなしではなく、英語を通して何を理解するかが大事。その題材を理解するために英語以前に当然必要とされる教養が不足していることもあるので、環境問題であれば、それに関するエッセーなどを読ませたりすることもやらなければならない。小さなことをこつこつと続けて指導していくことが大切である。

平成19年度

(1) 第1回 SELHi 運営指導委員会 平成19年7月9日(月)

SELHi 運営指導委員

佐藤 健公 氏 (高校教育課 主任指導主事)

安井 信雄 氏 (能代北高等学校 学校評議員)

指導助言

- Warm-up は全員で一斉に行うと効果的。全員が集中するような方法を考えること。フラッシュカードが効果的である。Definition を調べさせることは不要。単語は文脈で覚えるように指導すべき。
- 生徒が集中して、授業に取り組むために毎時間、教科書プラスアルファの内容を提供することを配慮する。他の生徒の発表を聞いて書き取らせ、それをサマライズさせて意見を言わせる。別の生徒はそれを聞いて簡潔にまとめて自分の意見を追加して話すなど、いろいろ考えられる。
- Summary を交換してチェックさせる活動については、生徒たちに「正しい基準」がないので、生徒は添削のしようがない。集めて教師やALT が添削して返却した方がよい。簡単なコメントを付ける程度で良い。
- 授業は Review、Comprehension、Vocabulary、Reading Practice の順ではないか。意味内容が分かってから単語や音読の練習に入るのが主流。意味が分かってない文を何回音読しても意味が分かるようにはならない。シャドウイングの目的は何か、もう一度考えてみてはどうか。
- 45分間の授業時間は教師だけでなく、生徒も一切日本語を使わないようにさせたい。能代北高校であればできるであろう。人数が少なく、生徒も先生がどのようなパターンで授業をするのかが分かっているはず。

(2) 第2回 SELHi 運営指導委員会 平成19年9月25日(火)

SELHi 運営指導委員

佐々木雅子 氏 (秋田大学 教育文化学部 准教授)

水谷 佳延 氏 (秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

安井 信雄 氏 (能代北高等学校 学校評議員)

普通科の授業について

( )【授業者から】

山崎教諭(普通科1年 発展クラス): おとなしい生徒が多く授業の盛り上がりにはやや欠けるが、能力的には上で、成績面でみんなをリードしてほしい生徒たちである。リテリングの取り組みでは、もう1ランク上のものを目指している。本当の意味で力を付けさせるにはどうしたら

よいのか、ということが今後の課題である。

高橋教諭(普通科1年 標準クラス): 内容理解からリテリングまでの活動をおこなった。リーディングでは、一人の生徒がモデルリーディングをして、それを他の生徒たちがなるべく教科書を見ないで repeat する形で行った。リテリングでは、いつもはプリントにかかせているものを、本日は口頭で確認した。そのために、教科書の音読や穴埋めの summarize test など、繰り返し本文の内容を確認した上でおこなった。生徒たちは国際教養大学のアル レナー先生が言うように、英語をとにかくどんどん書いていくようになった。教科書から一步踏み込んだリテリングができるようになるのが、今後の課題である。

#### ( )【指導助言】

水谷氏 《高橋教諭の授業について》

New Word Micro Reading は早すぎるのではないかと。生徒が大変である。最後にまたシャドウイングをするよりは、Overlappingの方がよいのではないかと。この辺りの Reading Practice を統一させる必要がある。生徒たちが自ら声を出して発話するためには、授業が始まって15分くらい動かないといけない。そのため、例えば、Reading Practice は前課の Review として利用する。机間巡視で生徒を動かす。

リテリングは早く終わらせ、自分の考えを発表させる活動を。本文と関係のある形でスキットなどを使い、発表させる授業を。

また、黒板はきれいにしておく。褒めるときはアイコンタクトを保つこと。また、All English の授業中による日本語の効果的な作用を考えよう。なごませる、でもテンポを崩すようならよくない。

また生徒による発表は、みんなのほうを向いてするようにさせる。

授業における Reading の位置を確認すること、また、何かもう一つ活動を。一つ一つの活動は、一体何のためにやるのかをよく考えることが大切である。例えば、Reading は音に慣らすために使うのか、それとも、情報整理のためなのか。ねらいは何かをはっきりさせる。明確になると、かける時間、生徒に対する呼びかけの仕方が変わってくる。

リテリングは何のためにその作業をするのか、どういう技能を伸ばすのか、ということを考える必要がある。例えば、復習という過程を通して英語をストックさせる。ストックされた内容が、次のアクションに有効に作用を及ぼす。黒板にヒントを与えながら援助していく。その活動を通して、どういう能力を保证するのか生徒に説明してから行う。

1年生は全体的にもっと元気に授業に臨めるようになってもらいたい。また、先生たちには、子どもを引きつけ、子どもからアクションを引き出す覇気をもっと出してもらいたい。

佐々木氏 《山崎教諭の授業について》

ヒントを与えながら、対話型コミュニケーション能力を育てる。Interaction をとりながら、Retelling the story of Lesson 4 をうまくつなげる。生徒たちから Key Words を引き出す。出てこないものは Q&A (in English) でつなげていく。授業を子どもたちと一緒に作っていくということを覚えていてほしい。Sharing でヒントを与えていたり、Input & Output を上手く活用していくこと。グループワークにして、グループごとに競争させてみるのもよいと思う。また、ある程度下地ができているならば、Free Writing Grouping をさせ、Topic Sentence を生徒たちに挙げさせてみるのはどうか。

授業内での組み立てをよく考えること。個人で内省させるなどして、段階を踏んでコミュニケーションを意識させていく。わかったことを自分の言葉ではき出す、つまり、感じたことを自分の言葉で表現できるようになれば、オーラルへの移行がスムーズになる。すると、3年生でのディベート活動がやりやすくなる。そのために、プラスアルファのアクションを。例えば、家で書かせてみる、お互い読んでみる、そしてそれを黒板に書いてみる、さらにそれに内容や自分の考えなどを付け加



えてみる、など。

Comprehension の活動では、そこにある質問だけでなく、その場でいろいろ Question を付け加えていくと、対話型コミュニケーションとして成り立つのではないか。

安井氏

一つ一つの活動が何のためにあるのかを念頭におく必要がある。そうすると、生徒への呼びかけの仕方も変わってくる。Reading も種類によって目的が違うので、何が目的かを考えて行う必要がある。リテリングを行うには、生徒に単語を input させる必要があるので、復習の段階で暗記をさせてみたらどうか。生徒にどういう能力を付けさせたいのかを明確にしてほしい。

佐々木氏 《2年生のディスカッションについて》

出てきたものに対してキーワードを使って自分の意見を出すのは苦手である。Question に対して答えがダイレクトに返ってこない。生徒の発話をこちらでいろいろと肉付けをして、より具体的なものに持って行ってはどうか。答えを賛成、反対の2通りだけにするのではなく、同じ意見を持つもの同士のグループを作らせるなど、活動を収束的にするよりは拡散的にしてもよいのではないか。Accuracy と Fluency の両方を求めるのは難しい。生徒も大変である。よって、自分の身近の specific な質問を与えて書かせる。そして、drastic に書かせる、言わせる、表現させる。

( )【質疑応答】

Q: 1年生の教科書は内容が薄いので、どのように発展させてディスカッションに持っていけばよいだろうか。

佐々木氏: 自分が知らないことについて意見を言うのはきついで、教材に忠実でなくてよい。生徒がくいつくようなトピックを考えるとよい。

英語科3年の授業について

( )【授業者から】

深沢教諭(英語科3年)

(ア)生徒間で英語のやりとりをさせる

(イ)全体のサマライズ テーマのポイント ディベート まとめ(もしくはディスカッション)

授業は、最初にテーマに対する自分の意見を出し、それを全体で sharing し、最後に自分の意見がどう変わるか、という流れになっている。生徒たちは、あらかじめプラス面とマイナス面の意見を考えておく。一人一人の使う英語の量を増やしたい。相手の意見を汲んで言うのが目標であるが、現時点では、書いてきたものを読む形になっている。なるべく authentic なものを与えて考えさせたい。課題は、深め方が足りないことと、Error Correction の仕方をどうすればよいか、ということである。

( )【指導助言】

水谷氏

女子校にしては静かすぎる。Group Discussion でも、必要があれば日本語 OK にした方が生徒たちは活発に意見を交わすようになるのではないか。45分の授業時間に対して、授業内での活動が盛り沢山過ぎるのではないか。3等分にざっくりと切って時間を使う方がよいのではないか。書いたものをただ写すだけではナンセンス。

佐々木氏

見ていて安心感のある授業だった。生徒が間違った英語表現を使ったことに対しての深沢先生の error correction がよかった。いろいろな表現でやりとりして、どれが近いかを探っていくのはよい。

生徒が自分の思ったことを英語にするときの気付きをどうするか。言語習得においては、ペアワークやグループワークを全て英語にしてみる。ただしこれは、不安が高いとマイナスになる側面がある。そのため、Communication Strategy として定型表現をリストにして与える。Language User として、Input をもらいながら、かつ Output もしていく。Language Resource が暗示的なのか明示的なのか、岐路がはっきり内在化するまで待つ。Interaction すればするほど伸びていくケース。

安井氏

英語での指示がスムーズである。生徒同士の英語での会話があまり行われていない。レベルが高すぎるのではないか。生徒の活動を促すヒントをもっと与えられるとよい。話す態度を養っていく必要もある。

(3) SELHi 授業公開 研究協議会 平成19年11月2日(金)

SELHi 運営指導委員

阿部 祐子 氏(国際教養大学 国際教養学部 准教授)

佐藤 健公 氏(秋田県教育庁 高校教育課 主任指導主事)

水谷 佳延 氏(秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

安井 信雄 氏(能代北高等学校 学校評議員)

#### 【研究概要報告(資料集参照)】

高橋教諭:「対話型コミュニケーション」を目標とし、受信力から発信力へという流れで行ってきた。受信力を付けさせるためには、インプットの量を増やすように心掛けた。ディベート、スピーチの活動を取り入れた。

授業について

- ・ラジオ講座を活用した。
- ・他の授業を英語で行うことを試みたが、家庭科や地歴担当の先生の負担が大きいことや、受験の年であることから、今年には行わないことにした。
- ・オールイングリッシュの授業を引き続き行った。
- ・ペアワークを多く取り入れてきた。例えば、1年生ではキーワードを使って、自分の言葉で各パートの内容をリテリングし、ペアになってお互いのリテリングを発表しあった。

授業のプリントについて

研究の1年目は他校の研究成果を参考に試行錯誤しながら、どのようにしたら課題を解決できるかを考えた。その結果、キーワードを使ったスタイルが確立された。2年目は、ディベートを目標に行ってきたが、ディベートまではいかななくても、自分の意見を英語で話すことをめざして行ってきた。

深沢教諭:生徒の英語力の変化については、トータルでは3年生の始めで下がっているが、リスニング力に関しては伸びており、ラジオ講座や英語での SHR、オールイングリッシュの授業など、英語に触れる機会を多く作ってきた結果と考えられる。ライティング力が下がっていることに関しては、コミュニケーション中心の授業を行っているために、ライティングの練習の機会がなかなかないということがあげられる。またトピックの難易度が、学年があがるにつれ難しくなっているためでもある。

自分の意見を英語で述べるということを目指し、ディスカッションを取り入れてきた結果、生徒に行ってもらった Can-do のアンケートでは、生徒が幅広い話題について話し合ったり、討論したりすることができるかと自覚していることがわかる。

また、英語が得意な生徒に関しては、1年次のインタビューテストのときと3年次とを比べてみると、表情が明らかに変わっていることが分かる（インタビューテストの実際の映像を参照）。3年次ではアイコンタクトや笑顔で答えることができ、答えを準備していなかった質問を聞かれたときでも、たどたどしいながらも答えることができるようになっていく。ネイティブスピーカーとのコミュニケーションに抵抗を感じなくなっている表れである。

#### 【質疑応答】

Q：インタビューテストは年に何回行っているのか。

深沢教諭：年に2回行っている。

Q：3年生の授業でも和訳を先渡ししているのか。

深沢教諭：3年生の時点では内容もそんなに難しくないので、和訳先渡しは行っていない。

Q：和訳先渡しの問題点は何か。

高橋教諭：和訳先渡しには良い点と悪い点がある。和訳に頼りがちになることもあるので、和訳を渡すタイミングを考慮しなければならない。

佐藤教諭：英文を読もうという意欲がなくなる生徒もいるというのが悪い点である。生徒が自分のレベルにあわせて和訳を使えるという点は良い。

山崎教諭：1年生に対しては妥当な方法であると思う。

Q：ディベートでの両極端な意見をまとめるのは生徒にとってよいことである。両方の意見をまとめるのもよいのではないだろうか。さらに先生自身の意見を入れてみてはどうだろうか。

高橋教諭：今後の課題として検討したい

Q：3年生のスピーキングテストの際に、テストを受けていない生徒は何をしているのか。

深沢教諭：スピーキングテストは放課後や考查中のテストの後などに行っている。

Q：和訳はいつ渡しているのか。

高橋教諭：1年生は各レッスンの前に渡している。

#### 公開授業について

##### ( )【授業者から】

深沢教諭（英語科3年）：3年生になってからは、自分の意見を持つこと、他人の意見を聞いてもう一度考えてみるということを目標にしてきた。しかし、意見を考える際に論理的に考えるということがなかなか難しく、壁になる。今のクラスは、生徒のレベルの差が激しいので今回は得意な生徒と不得意な生徒というペアで活動させた。授業の始めに毎回行うミニディベートもいつも違うペアで行っている。授業では、教科書をもとに発展的な話題を取り入れている。今回の授業では、生徒が自ら一人ずつ発表したことがよかった。英語を話そうという姿勢の表れではないかと思う。

山崎教諭（普通科1年 発展クラス）：フリーライティングをメインに授業を行った。授業のはじめに生徒が発言しやすくなるような活動を取り入れている。普段はリテリングを行って、生徒に発表させたりしているが、フリーライティングをやったのは今回が初めてである。

高橋教諭（普通科1年 標準クラス）：リテリングをどのようにさせるかがポイントである。1年生の

うちでは英語がなかなかでてこないで、沈黙の時間が増える。どのようにして教科書の内容をインプットさせるかがポイントである。生徒は前向きに取り組もうとする。自分の意見を言う時間も取り入れている。

佐藤教諭(英語科2年):各レッスンの最後に自分の意見を言う活動をしている。生徒は間違ふのを怖がったり、考える習慣がなかったりする。授業の始めに即興の1分間スピーチを取り入れて、間違えてもいいからとにかくしゃべり続けるという活動をしている。この中で気づきがあればよいと思う。今回は、他人の意見を聞いてもう一度トピックについて考えてみるという活動を行った。

#### ( )【質疑応答】

Q:3年生の授業でPart1、Part2の授業(ディベートの前の授業)はどのように行っているのか。

深沢教諭:新出単語を確認したり、内容理解をTF questionで確認している。語のかたまりをプリントにまとめ(資料集参照)、それを用いて本文を確認している。

Q:同じレベルの生徒をペアにさせて活動をしたことはあるか。また、日本語はどれくらい制限しているのか。

深沢教諭:4人のペアにして活動させたりしている。授業で日本語を使うことを禁止すると、話し合いが止まってしまい、英語が不得意な生徒はやる気をなくしてしまうので、できるだけ英語を使うように指示している。

水谷氏:9月の時点では非常におとなしかった。その原因は日本語を禁止していたためだったので、そこまで制限しなくてもよいのではないか。意見を言うときに、母国語を制限すると、非常に苦しいものである。

佐藤氏:ペアについて。中学校でのペアの組み方を例にあげてみると、列ごとで交換したりしている。中学校では、ペアの組み方に非常に気を使っている。また、日本語の制限については、ある学校では、みんなに聞こえることは英語で言い、日本語を使うときはみんなに聞こえないように、小さな声で話すという工夫を行っている。

Q:1年生の授業では何を基準にレベル分けしているのか。

高橋教諭:1学期は出席番号順で機械的に分けた。2学期からは入試成績や1学期の考査の成績をもとにレベル分けをした。

#### ( )【指導助言】

佐藤氏:生徒は情報をやりとりしようという姿勢になっていた。今日の公開授業のような、沢山の人の前で、英語で自分の意見を述べるということは、高校生にとっては大変なことである。クラス全員がそれをできたということが素晴らしい。発信型コミュニケーションを成功させるために、いろいろな情報を得て、分析し、相手に伝えるという力を付けることが必要。友達の意見を聞こうとする姿勢も大切である。ノートを取ったり、周りと話したりする活動を取り入れてほしい。生徒の動きを把握し、授業の雰囲気作りをすることが大切である。生徒たちに Brand-new Information を与えていくのが教師の仕事である。

阿部氏:2年生の1分間スピーチ、3年生のミニディベートについては、発信に重きがおかれすぎている。生徒は友達の意見を書き留めようとすることに一生懸命になりすぎである。コミュニケーションにおいては、聞く姿勢(smile や eye contact など)も大切なので、聞く側に質問させてみるのもよいのではないか。授業での日本語の使用に関しては、英語で話した後、日本語で話すなど、不得意な生徒が理解するように確認している生徒もいたので、このように日本語を使用するのはよい。生徒の積極性を養うことも大切である。生徒が自ら発言し

たくなるような工夫をするとよい。授業の始めに「今日は全員に発表してもらうので、言いたいときに言ってください」などと、促すと生徒はよく自ら発表する。

安井氏： 授業で意図する所に生徒がのってきている。表情にゆとりがあるとよりよい。意見を言うという機会をもつことで、コミュニケーションを図ろうとする気持ちが作られていく。2年生の授業ではALTの活用がうまくいっている。特に、ALTが生徒の文法を直す場面がよかった。Native speaker でなければ分からない感覚というのがあるので、うまく活用していく必要がある。生徒の能力と意欲を両方伸ばしていくことは大変なことである。姿勢を育てることが必要である。

水谷氏： 高橋先生の授業については、ペアワークを取り入れるなど工夫がよくされてきている。今回のリテリングはかなりうまくいっていた。山崎先生の授業については、シャドウイングを行っていたが、欠点は聞こえなくなってしまうということなので、そこは配慮したい。みんなの前で生徒に発表させるのは、友達がどのくらいできているのかということが他の生徒のやる気につながるので、とてもよい。佐藤先生の授業については、プリントを見ながら発表する生徒もいたが、それを見ずに発表していた生徒もいたので、そのような生徒が増えるとよい。深沢先生の授業については、生徒の力が伸びてきている。意見をもつことに対して生徒は抵抗がなくなってきた。ぜひこの研究が終わった後も今のスタイルを維持してほしい。普及は大変なことだが、ぜひ英語の授業の活性化につなげてほしい。

(4) 平成19年度 文部科学省SELHi実地調査 平成19年11月16日(金)

出席者

仲野 友子 氏

(SELHi企画評価会議協力者、国際教育交換協議会日本代表部(CIEE)エグゼクティブアドバイザー)

SELHi運営指導委員

水谷 佳延 氏(秋田県教育庁 高校教育課 指導主事)

安井 信雄 氏(能代北高等学校 学校評議員)

授業者から

佐藤教諭【普通科2年 発展クラス】

- ・本時の目標は意見を伝えあうことだった。
- ・今まで意見を伝え合う活動は4回取り入れているうち、今回のスタイルで授業を行うのは2学期になってから2回目で前回から少し時間があいていた。
- ・生徒は自分の意見を伝えることに対して消極的である。
- ・段取り不足であった。(ALTとの打ち合わせが足りなかった)
- ・授業の始めに行った1分間スピーチによってしゃべろうという姿勢や意欲がでてきたと思う。
- ・今後は、生徒たちの意欲をもっと上げるような活動を取り入れていく。
- ・クラスが少し静かであった。

深沢教諭から【英語科 3年】

- ・普段の授業からキーワードを使って文章を読むことに慣れているので、ディスカッションでもキーワードを使って自分の意見を発表するという形をとっている。
- ・前回の授業では一人ずつ発表した結果、時間不足になってしまったので、今回は二人ずつ発表させたが、内容が盛りだくさんで、肝心の最後の部分で時間が足りなくなってしまった。しかし、中に

は自分でしっかりと調べてきて発表をしている生徒もいたのでよかった。

- ・始めに Agree 側にいた生徒の数と Disagree 側にいた生徒の数が友だちの意見を聞いた後で見事に变化していた。

#### 指導助言

( ) 佐藤教諭(英語科2年)の授業について

仲野氏

- ・他の学校で見る授業はいつも英語科だけなので、普通科の授業も見ることができてよかった。
- ・なかなか自発的に意見が出ないのはどこの学校でも共通の悩み。ALTの励ましでだんだん挙手する生徒が出てきたが、普通科のクラスである速度で自分から手をあげてくるのは速い。
- ・こちらが我慢して生徒が自発的に発表するのを待つのと時間管理のバランスが難しいところである。  
どのように自発的に発表させるのが課題である。
- ・声を出す機会が少ないのではないかと。声を出す工夫をしていくことで、言語を学ぶことにおいて大切な音声の力を付けることにもつながる。
- ・ライティングの目的(例えば、いかにたくさんアイデアを書くか)をもっとはっきりさせたほうがよい。ライティングの目標がはっきりしていないと、書こうという気が起きないものである。
- ・メモを取っている子を励ましているのは、メモを書くことの動機付けにもつながるのでよいことだと思う。ただし、生徒たちの出すライティングがどのように評価されるのかということは考えていかなければならない。
- ・Evaluation sheet について  
内容を細分化し、目標をはっきりさせたほうがよい。自分の言いたいことが言えたかどうかを評価するなど。先生も同じ水準で評価できるものがない。

水谷氏

- ・授業に対する取り組みが変わってきていてとてもよい。
- ・最初の活動である1分間スピーチは、ただスピーチするのではなく、どれくらいプリントから離れてスピーチできるかが大切である。例えば、顔を上げてアイコンタクトをするなど。
- ・授業の始めに行った1分間スピーチで盛り上がったので、授業の途中を工夫するといいい。そうすると生徒は意見を言うてくる。
- ・今回の状況で授業内に全員に発表させることになっていたのなら、始めから全員立たせてあてていくとよいのではないかと。
- ・話し合いの前に教科書の復習をしていたが、その復習と今回の話し合いのトピックである共学のこととは関連性がなく感じられたので、それはなくてもよかったのではないかと。授業時間も45分なので、メインのほうに時間を多く使うためにも無理して入れなくてもよかったと思う。本時が最後の活動ということで、カットしてもよかったと思う。
- ・この先、このような授業を続けていくと生徒が話すようになっていこうという印象を受けた。

安井氏

- ・回を重ねるにつれて、生徒の話そうとする意欲が見られた。
- ・何度も同じ形式を繰り返すことが必要である。そのことによって、生徒は慣れ、変化していく。
- ・ALTとの呼吸があっている。今後もっとALTの活用を広げていってもらいたい。
- ・後半のディスカッションの部分では、"I agree because ..."などの表現形態の繰り返しが必要だと思う。
- ・このようなディスカッションのモデルリーディングの繰り返しが1時間のうちに何回かあるとよいのではないかと。そうすると、先生も生徒も慣れてきてもっとよくなるのではないかと。

( ) 深沢教諭の授業について

仲野氏

- ・3年間の研究の成果がでていた。授業がよく工夫されている。生徒が一生懸命授業に参加しようとしていた。
- ・生徒が自分の意見を持つときに、どうしても内容がジャンプしてしまうときがあるので、そのときは先生の言葉を借りてでも論理的に書くことが大切である。
- ・ライティングは英語を伸ばす上で重要なことである。書くことによって英語が伸びる。
- ・ライティングのもたらずものを生徒に教え、意識して論理的に書くなどの細かい助言をするとよい。また、お互い論理的かどうかを勉強し合う場を持つのも一つの方法である。そうすることによって、発表することに抵抗が無く、周囲がそれにまた意見を述べ、お互いにお互いを高めていくことができる。
- ・英語科の生徒は意見を持つということを繰り返していくうちに、発言することに抵抗がなくなってきている。国際会議において最近気付いたことは、日本人はよく聞いてから話す傾向にあるが、社会で求められるのはやはり恥をかいてもいいから、とにかく思ったときに話すことである。外国人は話さないと忘れてしまうという感覚を持っているのである。

水谷氏

- ・前回の授業では、最終的に自分は Agree 側か Disagree 側かという決断をしたときには生徒の数が変わらなかった。今回は見事に変わったので、教師としてはそこ（生徒たちの考えが授業の前と後ではどのように変わったのか）が一番おもしろいところである。
- ・この研究の成果を他の学校にどのように普及するか、また決まった形でこのスタイルをこの学校に残していくということが課題である。能代北高では年度が変わっても、この授業形態を継続してほしい。

安井氏

- ・“Thinking in English” というように、英語でものを考え、組み立てているのだな、という印象を受けた。これから先の能代北高の授業のスタイルをますます練り上げ、思い切って省いてよい部分は省くなど、ますますよい方向に工夫をしていってほしい。

仲野氏

- ・実社会でも必ず四つのスキルが必要とされる。自分で学ぶ力をどのように伸ばすか、効果的な方法は先生方が自分で教えていく。
- ・特にライティングが必要で、書くことによって自分で考えることが必要になるのに気付く。
- ・いろいろなディスカッションの方法を試してみて、どの方法がよいのかを見つけるのがよいのではないか。



## 10 外部講師の講演・授業外活動の記録

平成17年度

### (1) SELHi 特別講義

平成17年10月26日(水): 渡部良典氏(秋田大学 教育文化学部 助教授)

1年生(普通科と英語科の176名)を対象に“English, English, Everywhere”という題で講義を実施した。

- ・ 第一言語と第二言語に必要な能力を比べるとお互いに重なる部分があり、英語力を付けるためには語学そのもの以外に様々な知識も大切である。
- ・ 日本のアニメ(となりのトトロ)を英語の吹き替えで見ると、英語が苦手な生徒でもおもしろいと思うことができる。また、日本語によるアニメの題やテレビ番組などを英訳したもののクイズを通して、英語への興味付けを行った。  
〔例: Spirited away 「千と千尋の神隠し」 Star Blazers 「宇宙船艦ヤマト」  
Princess Knight 「リボンの騎士」 Comedy Hour Tetsuko's Interview 「徹子の部屋」  
The Narrow Road to Oku 「奥の細道」 Diet Session 国会 military cut 丸刈り〕
- ・ 物事は見方を変えるとまったく違って見えてくるため、英語を異なる視点で見ると興味が湧いてくる。
- ・ 英語は自分の知識に結びつかないと理解することができないため、英語が苦手なのは英語力が問題ではない。例えば、英単語は人の名前のように印象付けると覚えやすくなるため、lamentable(悲しげな)という単語を「ラーメン食べる 悲しい 受験生」と歴史の年号を覚えるときのように語呂合わせにすると記憶に残りやすくなる。また、英単語は漢字の部首のようになっていて、acro-には「高い」という意味があって、acrobat「曲芸師」という単語を作ることができ、さらに、phobia「恐怖症」と結びつくとacrophobia「高所恐怖症」という単語ができる。
- ・ 英語力を高めるためには、“Stop and ask”により、考えながら活動することが重要である。
- ・ よく聞くと話せるようになり、よく書くと読めるようになるため、聞くことと書くことは大切である。
- ・ 英語の本を読んだり英語で日記を書いたりすることも効果的であり、3分間で英文を3文書くことを勧める。(Three minutes diary)
- ・ 言語は複雑であるため、なかなか能力が伸びない気がするが、学習時間に従ってらせん状に能力は伸びていくものである。だから、焦ったりあきらめたりすることなく、学習を続けることが大切である。
- ・ 独り言を英語で言ってみるなど、いつでも英語で表現することを心がけると英語力は養われる。

### (2) SELHi 特別講義

平成18年2月8日(水): 西田弘次氏(千葉大学 法経学部総合政策学科 専任講師)

1年生176名と2年生英語科25名を対象に“What's communication!?! ~自分が変われば世界も変わる~”という題で講義を実施した。

- ・ コミュニケーションというものをバスケットボールに例え、生徒に実際にバスケットボールを使ってパスをさせ、もし相手が怪我をしているのが分かっているときはどんなパスを送るか。と問いかけ、強いチェストパスではなく柔らかいバウンズパスをすることを導き、会話も相手のことをよく考えて、よく見てから言葉をなげかけるようにすると、よりよいコミュニケーションがとれる。
- ・ カ一杯に握らせた拳を人の心に例え、相手が開こうとしない限り開くことができない。開くことができるのは「心」である。きちんと向き合って、心から話しかければ相手は必ず心を開く。
- ・ 話すことが苦手な人へは、少しだけ顔や体を相手に向けることを勧め、少しでも話そうという態度

を示せば、必ず誰かが気づいてくれる。少しだけ勇気を出すだけで世界が変わる。つまり、自分が変われば世界が変わる。

#### 《生徒の感想》

- ・ 今までは無理だとあきらめたり、下手な英語を話すことに抵抗があったけれど、これからは本気でやってみようと思う。
- ・ 一番印象に残ったのは、どんなきっかけでもその人のやる気があればどんなことでもできるということだ。
- ・ 私は友達になりたいと思った人がいたら、黙っていないで自分から行動するようにしている。そのおかげで、本当の友達と呼べる関係もできた。今思うととても勇気を出したのだと思う。心から友達になりたいと思ったことが一番の理由だということを実感した。
- ・ After I listened to Mr. Nishida's speech, I want to change something, because I heard "If I change myself, the world will change"
- ・ 西田先生のお話は英語という限られたもののことではなく、人として人生を送る上で大変勉強になった。今回の講義で、少し勇気づけられた気がする。これから高校を卒業し、社会に出ていっても自分の心を閉ざすことなく様々な人と交流し、楽しい時を過ごしたいと思う。その交流の手段としてもっと英語を学び、いつかは海外にも行って世界を自分の目で見て実感していきたい。

#### (3) 英語科1年英語集中セミナー

i) 日時 平成17年9月26日～27日

) 場所 プラザクリプトンホテル

) 実施要項

##### Monday, September 26<sup>th</sup>

- 8:30 - Departure
- 10:20 - 10:40 Opening Ceremony (ice breaking)
- 10:50 - 11:50 Show and Tell 1
- 11:50 - 12:50 Lunch
- 13:00 - 14:00 Show and Tell 2
- 14:10 - 14:30 Judges' conference
- 14:40 - 15:30 Communication activity 1 (Fruit Basket, Hot Seat)
- 15:40 - 16:30 Communication activity 2 (Hokey Pokey Song, Wheel of Fortune)
- 16:40 - 15:50 Break / Group Talk
- 18:00 - 19:00 Supper

##### Tuesday, September 27<sup>th</sup>

- 7:30 - 8:40 Breakfast
- 8:40 - 9:40 Communication Activity 3 (Alphabet Game, Body Parts)
- 10:00 - 10:40 AIU Campus Tour
- 10:40 - 12:00 A Session of Focused Listening and/or Independent Learning at AIU
- 12:10 - 13:00 Lunch
- 13:00 - 14:00 Communication activity 4 (A Lecture by Dr. Lehner)
- 14:10 - 15:00 Taking a photo
- 15:00 Departure

) アクティビティの内容

### Show and Tell

Students bring their precious thing and talk about it in a group. Speakers repeat their presentation as they move around each group and other students ask questions about the contents.

《 Evaluation 》 Contents:50 points /Pronunciation: 30 points /Delivery : 20 points.

#### *Comments:*

The students worked well and the idea of rotating the people in the groups was great. I think the students really enjoyed hearing about the ALTs favorite thing. It was a nice touch.

I would like it better if we had an opportunity to choose a top 10 and then listen to those speeches again before deciding. It ' s hard to judge the best one when listening to 20 speeches - but still very good.

### Fruit Basket

Students are seated in a circle, one person without a seat stands in the middle and come up with a category (i.e. everyone who likes natto) and all the students who belong to that category must get up and change seats. The student left standing must make up a new category. If the student shouts "Fruit Basket" everyone must get up and switch chairs.

### Hot Seat

One student from each group sits down and a piece of paper with the name of a famous person is held up behind her. Then she must ask the members of the group yes/no questions to figure out who the person is. When she gets the right answer, another student takes a turn to sit down and guess the answers. Each group gets points for the right answers.

*Comments:* Hot Seat should have more famous Japanese people the students will recognize; the names of bands, names of characters in famous movies or plays. Famous politics, famous historical figures since some of the students didn ' t recognize Hollywood celebrities instantly.

/ I felt that Hot Seat ended up being slightly difficult when some girls knew a person and some didn ' t.

### Wheel of Fortune

Divide the class into teams of 4 or 5 and put a hangman type phrase on the board (without the letters). Jan ken to determine which team will begin and have them draw a card from the stack. If they draw a dollar value card, then they can choose a letter. If the letter exists in the phrase, then they get the dollar value. If they get a "task card" then they must first complete the task, and then choose a letter. Only one turns per team, and then one to the next team. Only the team whose turn it is can solve the puzzle. The winning team gets to carry their winnings over to the next round, and the champion is determined by cumulative winnings.

### Alphabet Game

Students are to make teams and have to guess words which start with a certain letter of the alphabet (e.g. A yellow fruit which begins with B). The letters of the alphabet are on a board and the students pick a letter. Each team gets a point for each correctly answered question.

### 《生徒の感想》

- ・ 一日中英語に囲まれてとても疲れたけれど、楽しく英語に触れることができよかった。
- ・ グループにALTの先生が一人いることで英語を使う機会が増えたとし、たくさん頭を使うことができ良かった。キャンプをやる前に比べて英語が使えるようになったと思う。
- ・ 英語を話して自分の言いたいことが相手に伝わったとき、すごくうれしくなった。英語がもっと好きになり、特に英会話の勉強をしたくなった。
- ・ スピーチを考えたり覚えたりするのは大変だったけれど、いろんな単語や表現を覚えられたので良かった。発表が終わったとき、自分の考えを英語で話せたことに満足した。
- ・ スピーチはとても緊張したけれど、数をこなしていくうちに慣れてきて、英語で話している自分がなんとなくすごいなと思った。
- ・ 大学を訪問できてよかった。生徒が勉強しやすいように、設備が充実していた。
- ・ 国際教養大学の学生の英語に圧倒された。あんなふうに話せるようになりたい。

平成18年度

#### (1) SELHi 特別講義

- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| 6月16日：ケリー キング氏 | 国際教養大学 国際教養学部 教授     |
| 9月22日：アル レーナー氏 | 国際教養大学 国際教養学部 教授     |
| 2月21日：西田 弘次氏   | 千葉大学 法経学部総合政策学科 専任講師 |

#### (2) 「能代カップ」高校選抜バスケットボール大会 通訳ボランティア

5月3日～5日

国内外から強豪校を招待し、地元の能代工高を含めた6チームのリーグ戦で優勝を争う高校バスケットボール大会において、海外高校チームのための通訳ボランティアや英語での場内アナウンスを本校生徒が担当し、大会の運営に貢献した。



#### (3) 英語部クリスマスキャロル

12月18日

英語部の生徒12名と近郊在住のALTが市内のショッピングセンター前で英語でクリスマスキャロルやミュージックベルの演奏を行い、集めた募金を歳末たすけあい募金に寄付した。



#### ( 4 ) 英語集中セミナー

##### 英語科 1 年英語集中セミナー

日時 平成 1 8 年 9 月 2 1 日 ~ 2 2 日

場所 プラザクリプトンホテル

##### 実施要項

###### Thursday, September 21<sup>st</sup>

- 8:30 - Departure
- 10:20 - 10:40 Opening Ceremony ( Ice Breaking)
- 10:50 - 12:00 Show and Tell (Contest) Preliminary
- 12:00 - 12:50 Lunch
- 12:50 - 13:10 Judges ' Conference
- 13:10 - 13:50 Show and Tell (Contest) Final
- 13:50 - 14:10 Judges ' Conference
- 14:20 - 15:20 Communication Activity 1 (Scattegories)
- 15:30 - 16:30 Communication Activity 2 (Fruit Basket & Jeopardy)
- 16:30 - 17:50 Recreation
- 18:00 - 19:00 Supper
- 19:00 - 21:00 Group Talk / Watching Movies

###### Friday, September 22<sup>nd</sup>

- 7:30 - 8:30 Breakfast
- 8:40 - 9:40 Communication Activity 3 (Board Game)
- 10:00 - 10:40 AIU Campus Tour
- 10:40 - 12:00 Communication Activity 4 ( Simulation Game)
- 12:00 - 12:50 Lunch
- 13:00 - 14:00 Communication activity 5 ( A Lecture by Dr. Al. Lehner )
- 14:10 - 14:30 Closing Ceremony , Cleaning Up
- 15:00 - Departure

##### 英語科 2 年英語集中セミナー

日時 平成 1 8 年 6 月 1 5 日 ~ 1 6 日

場所 プラザクリプトンホテル

##### 実施要項

###### June 15<sup>th</sup> (Thu)

- 8:30 - Bus Leaves Noshiro Kita HS for Plaza Clypton
- 10:00 Meet / Arrive at Plaza Clypton
- 10:20 - 11:00 Opening Ceremony ( Ice Breaking )
  - Opening Comments
  - Self - Introductions
  - Create Team Names
  - Explain Activities
- 11:10 - 12:00 *Activity 1 (Preparation for Speech, Speech )*

11:50 – 12:50 Lunch  
 13:00 – 14:00 *Activity 1 (Speech )*  
 14:10 – 14:30 Judges ' conference  
 14:40 – 15:30 *Activity 2 (Don' t say the word :ALTs Ss, S Ss )*  
 15:40 – 16:30 *Activity 3 (Scattegories)*  
                   *Activity 4 (Twenty Questions )*  
 16:40 – 17:30 *Activity 4 (Twenty Questions )*  
 18:00 – 19:00 Supper  
 19:00 – 21:00 Watching a movie (Finding Nemo)  
 21:00 – 22:30 Students in Rooms  
 23:00           Lights out

**June 16<sup>th</sup> (Fri.)**

7:30 – 8:30 Breakfast  
 8:40 – 9:40 *Activity 5 (Witness and Report)*  
 9:50 – 10:50 *Activity 6 (Four Corners)*  
 11:00 – 12:00 A Lecture by Ms Kelly King  
 12:10 – 13:00 Lunch  
 13:00 – 14:00 *Activity 7 (Jeopardy)*  
 14:10 – 14:30 Closing Ceremony  
 14:30 – 15:00 Clean up (Taking a Photo)

**Speech**

There are six groups of four. Two students from each group present their speech and then the other pair does their own. Listeners vote the speech they think persuasive and winners will be chosen.

It is better to live in Akita than in Tokyo. / It is better to live in Tokyo than in Akita.

Girls' high schools are better than coeducational high schools.

/ Coeducational schools are better than girls' high schools.

If I were born again I would like to be female.

/ If I were born again I would like to be male.

(Men have more benefits than women. / Women have more benefits than men.)

Emails are better than letters. / Letters are better than emails.

English education should start in elementary schools.

/ English education does not have to start in elementary schools.

School uniform is better than no uniform.

/ No uniform is better than school uniform.

( Evaluation by ALTs : Contents:50 points / Pronunciation: 30 points /Delivery : 20 points )

《生徒の感想》

\* B・・・basic skilled students   A・・・advanced students

1. 二人一組でスピーチをしたことについて

- ・一人でやるよりいろいろな意見が出るし、心強かった。( B : 3人 )
- ・お互いに教え合ったりできてよかったし、考え方がいろいろあるので話が膨らんだ。( B : 2人 )
- ・二人で協力し合うことにより、単語力や文章力を共有して間違いを指摘し合うことができた。( A )

- ・一人で考えるより二人で意見をまとめる方が説得力があるように思う。しかし、意見が合わないと進まないため、原稿を完成させるのにより時間がかかった。(A)
- ・誰かとペアでやることによって、お互い責任感が出てくるので出来がもっと良くなると思った。(A)
- ・スピーチの際に、内容が少しとんでしまったが、目線を上げて「伝わる」ように心がけてスピーチできたのでよかった。(A)

まとめ：お互いに意見を出したり指摘し合ったりすることができたので、スピーチを考えやすかった。一人の時よりもやる気がでて、発表の時もあまり緊張しなかったのが楽しかった。

## 2. 一つのテーマについて、異なった立場でスピーチをしたことについて

- ・題が決められているとネタ切れしてしまう部分もあったが、書きやすかったし、ディベート式だと対抗できるので、頑張っって主張したくなった。(B: 2人)
- ・反対意見を聞くことができ、よかった。(B: 5人)
- ・難しかったけれど、おもしろかったし、英語の力が付いたと思う。(B: 2人)
- ・ディベートのほうがレベルが高いから、表現力が高まったと思う。(A)
- ・異なった立場の意見を聞くことはとてもおもしろく、知識も得られたが、次は自分でトピックを自由に選びたいと思った。(A)
- ・テーマについて、良いところだけを抜き出して書くのはとても難しかった。(A)

まとめ：対抗することでやる気が出たし、違う視点からの意見を知ることが楽しかった。

## 3. その他感想

- ・去年より難しかったけれど、楽しかった。自分の英語力が少し上がっていて、ALTや先生の話している内容がすんなりと理解できた。今回のキャンプでまた、少し英語に近づいた気がする！(B)
- ・去年より英語がわかったし、スムーズに英語が言えてうれしかった。(B: 3人)
- ・スピーチが聞き取れなかったし、内容はしっかりしていると思ったけれど、理解が難しく、聞く気が起きなかった。国際教養大の学生など、いろいろな人と話す機会があって、楽しかった。(A)
- ・みんなの単語力と知識の豊富さに驚いたキャンプだった。パートナーとの友情を深めることができ、二人で協力してスピーチを作っていく過程も楽しむことができた。ALTには自分からも話すことができたし、ジェスチャーも交えて会話のキャッチボールができた。クイズでは地理的なことがわからなくて、退屈してしまった。(A)
- ・単語を説明したり、質問しながら言い当てるゲームでは、英語力が一番身に付いたと思う。活動以外でもALTとたくさんコミュニケーションをとることができてうれしかった。昨年のキャンプより、ALTと1対1で話すこと(自分の考えを言ったり、聞き返したり、質問をすること)がこわくなくなった。文法がめちゃくちゃだったかもしれないけれど、自然と英語が出てくる気がした。(A)

まとめ：去年のキャンプよりも英語が理解できて、ALTと楽にコミュニケーションをすることができた。また、単語を説明したり、単語をあてるために質問をたくさん考えたりしたことで、さらに英語の力が身に付いた。「スピーチはおもしろかったけれど、聞き取りが難しかった」と答えた生徒はたった一名で、「スピーチを通して異なる意見を知ることができてよかった」と答えた生徒が多かったのは、意外な結果である。

平成19年度

### (1) SELHi特別講義

6月22日：アル レーナー氏 国際教養大学 国際教養学部 教授



( 2 ) 英語科 2年 英語集中セミナー

日時 平成19年6月22日～23日

場所 プラザクリプトンホテル

実施要項

June 22<sup>nd</sup> (Thu.)

- 8:30 - Bus Leaves Noshiro Kita HS for Plaza Clypton  
10:00 Meet / Arrive at Plaza Clypton  
10:20 - 11:00 Opening Ceremony ( Ice Breaking )
  - Opening Comments
  - Self - Introductions
  - Create Team Names
  - Explain Activities11:10 - 12:00 *Activity 1 (Preparation for Speech, Speech )*  
11:50 - 12:50 Lunch  
13:00 - 14:00 *Activity 1 (Speech )*  
14:10 - 14:30 Judges ' conference  
14:40 - 15:30 *Activity 2 (Don' t say the word :ALTs Ss、 S Ss )*  
15:40 - 16:30 *Activity 3 (Scattegories)*  
*Activity 4 (Twenty Questions )*  
16:40 - 17:30 *Activity 4 (Twenty Questions )*  
18:00 - 19:00 Supper  
19:00 - 21:00 Watching a movie (Finding Nemo)  
21:00 - 22:30 Students in Rooms  
23:00 Lights out

June 23<sup>rd</sup> (Fri.)

- 7:30 - 8:30 Breakfast  
8:40 - 9:40 *Activity 5 (Witness and Report)*  
9:50 - 10:50 *Activity 6 (Four Corners)*  
11:00 - 12:00 A Lecture by Ms Kelly King  
12:10 - 13:00 Lunch  
13:00 - 14:00 *Activity 7 (Jeopardy)*  
14:10 - 14:30 Closing Ceremony  
14:30 - 15:00 Clean up (Taking a Photo)

( 3 ) 英語科 1年 英語集中セミナー

日時 平成19年9月6日～7日

場所 プラザクリプトンホテル

実施要項

September 6th (Thu.)

- 8:30 ~ Departure
- 10:00 ~ 10:20 Unpacking, Preparation for Opening Ceremony
- 10:20 ~ 10:40 Opening Ceremony, Orientation
- 10:50 ~ 12:00 *Workshop 1 (Speech Contest Preliminary)*
- 12:00 ~ 12:50 Lunch
- 12:50 ~ 13:10 Judge ' s Conference, Announcement for the Final
- 13:10 ~ 13:50 *Workshop 2 (Speech Contest Final)*
- 13:50 ~ 14:10 Judge ' s Conference
- 14:20 ~ 15:20 *Workshop 3 (Communication Activities)*
- 15:30 ~ 16:30 *Workshop 4 (Making Skits)*  
*\*Each group finish making a skit before lights-out.*
- 16:30 ~ 17:50 Free time
- 18:00 ~ 19:00 Supper, Clean up
- 19:00 ~ 21:30 Free time, Bath
- 21:30 ~ 22:00 Bed making, Lights out at 22:00

**September 7th (Fri.)**

- 7:30 ~ 8:30 Breakfast, Clean up
- 8:40 ~ 9:40 *Workshop 5 (Skit Presentation)*
- 10:00 ~ 10:40 *Workshop 6 (AIU Campus Tour)*
- 10:40 ~ 12:00 *Workshop 7 (Communication Activities)*
- 12:00 ~ 12:50 Lunch, Clean up
- 13:00 ~ 14:00 *Workshop 8 (A Lecture by Mr. Al Lehner from AIU)*
- 14:10 ~ 14:30 Closing Ceremony, Announcement of Winners & Awards
- 14:30 ~ 15:00 Clean up (Taking Photos)
- 15:10 ~ Departure